

60

831

事故本

P203-204

頁一部欠損

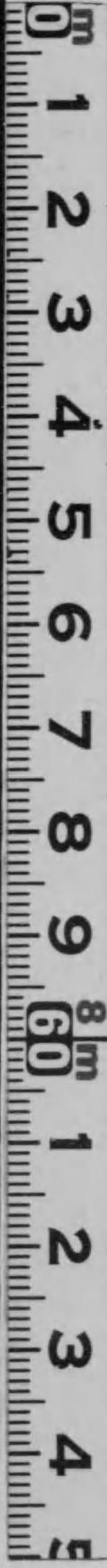
欠10-シ

P267~268

196.8.2

○

複写



始



ト工-4W-27

田中香涯著

愛慾に狂ふ痴人

東京大阪屋號發行

大正  
15. 10. 21  
内交

60-831

はしがき

人間の善美なる光明面の讚美は道學先生や宗教家に任かすことにして、その反對の醜惡なる暗黒面の觀察と研究とに興味をもつ私は、曩に刊行した『人間の性的暗黒面』『愛と殘酷』の姉妹篇として、愛慾世界に狂踊亂舞する痴人の時代相を如實に描寫論述せる本書を復たもや江湖に提供することにした。

大正十五年の初秋

著者

# 愛慾に狂ふ痴人

## 目次

愛慾の遊戯	一
娼婦型の女性	一八
先天的賣笑婦	三六
微毒に傳染したるシヨールペンハウエル	四五
英國王ヘンリー第八世と微毒	五五
微毒患者と看做された哲人ソクラテスとアウグスツース大帝	五八
姦通の讚美者 <small>有島武郎の死</small>	六三
性慾倒錯者としてのルツン	六四

「マソヒスムス」と結婚……………九二

極端なるマソヒスムスの一女性……………九七

江戸時代の文獻に見えたる屍愛と快樂殺人……………一〇二

印度の古典「カマストラ」に於ける變態性慾……………一〇七

女を刺し或は切る男……………一一〇

偶像に戀する男……………一一三

戀の病……………一一三

露出症……………一一七

男子同性愛のローマンス……………一二四

コカイン中毒と同性愛……………一二五

「兔園小説」に記述せる男性的女子と女性的男子……………一二七

女になりすました男Ⅱ性慾顛倒症の一例Ⅱ……………一二八

同性愛の分類と假性異性愛……………一二七

快樂殺人Ⅱ近年佛國及び獨逸に起りし實例Ⅱ……………一八〇

嫉妬に因る殺傷……………一八七

一種の精神的オナニー……………一九六

變態性慾者の新聞廣告……………二〇一

性交の嫌忌に基因する子宮出血……………二〇三

女子の慘虐性……………二〇四

去勢者に於ける心理状態の變調……………二〇八

變態性慾小説「死刑執行人の死」に就て……………二四二

ある女教師の話（小説）……………二五〇

土器傳と本莊幽蘭……………二七三

江戸時代に姦通の多かりし理由……………二七七

年齢に因る愛の對象の轉移……………二六五  
變態性慾講話……………二六六

一 緒言……………二六八

二 性慾遲期症……………二六九

三 性慾の分量的異常……………二七三

四 性慾の性質的異常(性慾倒錯)……………二七五

(甲) 性慾顛倒

(乙) 疼痛淫亂症

(丙) 節片淫亂症

(丁) 露出症

# 愛慾に狂ふ痴人

田中香涯 著



愛慾の遊戲

人間が野蠻狀態より文化生活に入つたのは、歴史がユウフラトス河畔にそのスタートを切てから大約五千年以來のことである。五千年といへば甚だ永い星霜のように思はれるが、しかし人間の始めてこの地球上に現出したのは實に今から五六十年以前のこと、殆ど獸類と大差のない野生の生活を送つてきたのであるが、併し吾人の文化生活なるものが僅に五千年以來のものに過ぎないことを思へば、人間未來の野性

本能のなほ依然として強烈であるのも決して異とするに足らない。數十萬年といふ久遠の星霜の間、獸類と大同小異の野生生活をたどつて來た人間の本質が僅か五千年の文化生活をなしたからと云つて著るしく變化する筈はないのである。今日の文化人が禮讓を重んじ儀式を尊び、飲食色情に關することを口にすることを憚り、野生本能を暴露しないのは、要するに日常の生活に不自由がなく、且つ社會的及び法律的制裁の下にある平素の場合のことで、平和を説き人道を口にする人間も、一朝飢餓に迫つた時には、餓虎の如くに見當り次第、何物でも口に入れるようになり、他人を突き倒し押し退けてもその強烈なる食慾を満足せんとする。また一たび戦争が勃發して血を流すようになれば、敵地の物品を掠奪して飽くなき所有慾を充たし、婦人を姦淫して、旺盛なる性慾を満足し、野性本能を赤裸々に發揮して毫も意に介しない。平素は文化といふ袴を着けてゐるので、近代人の外觀は美しく立派に見えるが、併しその本來の野性本能は袴の窮屈さに堪へず、機會さへあれば自然の野性に還らんとする傾向がある。

ハイソリツヒ、シユルツも言つた如く、人間の本能はその環境の變化に應じて決して決して同様に變化するものでなく、文化生活に入れば入る程、その抑壓と矛盾とを感じ、自然天眞の本能を味ひたいといふ要求が起つてくる。そこに文化生活の撞着と悲喜劇がある。

しかのみならず、文化の開発と富の増進とによつて人類の生活の安全となり享樂に向ふのは、自然の結果であつて、生活の安全と享樂とは、自ら本能的慾望の衝動を誘發せざるを得ない。しかし、文化と道德とは人間本來の野性本能を露骨に發現することを許さないから、近代の文化人はそれを複雑に技巧的に修飾しなければならぬ。文化其者の實體が既に社會的の技巧化である。老子は自然に歸れと云つたのに、孔子は禮儀三百を作つて文化振りを發揮した。人間は文化と云ふ窮屈な檻の内に自ら這入て自繩自縛の苦を痛感しながら、しかも之を矜誇とするが如き矛盾性を有つてゐる。されば性慾の衝動があつても、それを赤裸々に表現するのを憚ると、一定程度まで之

を抑壓するの己むを得ざるがために、外觀上では、文化の増進と共に性慾の減退するが如くに見えるのである。さりながら生活の安全と享樂とが勢ひ肉體的な要求を増進せしめ、自己の快樂を中心として、之を満足させる刺戟を追求するようになるのは、必然の歸嚮であつて、社交機關、娛樂機關といへる名稱の下に、幾多の紳士淑女の會合する舞踊場、音樂堂、劇場、カフェー等は、之を一面より見れば社會生活の性慾化であり、また性慾の文化的技巧とも云つて可い。

二

人間がその生活を維持するには、これに必要なだけの食物を家庭に於て攝つて居れば既に事足る筈であるのに、わざわざ料理屋や、レストランに往いて飲食する者の絶えないのは何故か。妻君一人を守つてゐさへすれば、生殖の目的は達せられるのに、花柳狹斜の巷に足を入れる者の絶えないのは何故か。是れ畢竟文化と道德とのた

めに壓迫され勝ちな慾望が、窮屈單調なる桎梏から脱して享樂の道を求めんとする反動的傾向の然らしめる處である。換言すれば、料理屋の食品を味ふのは、食慾の遊戲化であり、待合茶屋に遊ぶのは性慾の遊戲化であつて、文化的道德的生活から一時なりとも遁避して自由なる本能生活を享樂し、自由なる遊戲氣分を味はんとするがためである。

希臘の文化がその高頂に達した時代に於て、社交界に横行し、政治家や學者の愛を受けた女性は「ヘテレー」と稱する高等賣笑婦であつた。肉體美を尊重し、女神ヅエヌスを美の本尊として禮讚した希臘人は、容色を第一として媚を賣り一笑百媚の嬌態を演ずる「ヘテレー」に親しんで、性慾の遊戲的享樂に光陰を費消したのである。當時アデンに於ける良家の妻女は、唯だ家庭に蟄居して、單に日常の有り觸れた裁縫庖厨の業のみに従ひ、主人に慰藉を與へる素養も技巧も無かつたから、家庭の無趣味と窮屈とに堪へざる希臘の學者や政治家等は、容貌の美なるが上にも學問あり才能のあ



る「ヘテレー」に接近した。花恥しき美人であると共に學藝に通じ愛嬌に富み、魅力に長せる「ヘテレー」が教養ある男子の愛慾を惹いたのは當然の話である。文藝復興時代に於ても、佛國、伊太利の宮庭には「クルチサン」と稱せられた性的技巧に長せる美姬妖媛が王侯に寵幸せられ、自由戀愛の對象となつた。

すべて高等賣笑婦は、その容貌姿態の妖艶なるのみならず、その起居振舞、手ぶり足ぶり等に至るまで、普通一般の女性に比して強く男子を魅するようになつてゐる。されば、此の如き女性によつて愛の遊戯的享樂を求め、特殊の情味ある刺戟を受けんとするがために、彼女達の嬌態痴語に酔ふて之に耽溺するに至るのは、恰も酒や煙草の有害なることを知りながらも、その味神經に作用する一種特別の快覺のために之を嗜好するのと同じである。生活を維持するがための飲食をば純生活より分離して、たゞ食慾の快感と享樂とを充たさんがために料理屋の出來たのと同様に、男女の結合は、もと生殖のためであるのを、その本來の目的から引き離して單に肉體の歡樂

を求めて遊戯氣分を味はんとする本能より「ヘテレー」「クルチサン」、白拍子、藝者等の如き高等賣笑婦を出だすに至つたのである。苟くも人間に這般の本能的傾向の存する限りは、料理屋の決してその跡を絶つことないのと同じく、高等賣笑婦の消失するが如きことは滅多にない。たゞ露骨したる肉の供給者たる公娼は單に性慾のみを満足せしめるだけで、特殊の情味ある快美的刺戟を有つてゐないから、文化の進み趣味の向上するにつれて、公娼は次第に衰へ、高等私娼や待合茶屋の益々繁昌するようになる。藝妓が社會的には醜業婦と蔑視せられてゐながら、社交界に幅を利かし、紳士の寵を受けてゐるのは、單にその美貌のため許りでない、巧みに男子の性的遊戯の嗜好に投じて之を満足せしめる技巧を心得てゐるからである。

三

さりながら、新時代の教養ある男子は、藝妓にも飽きを感じてきた。いかに容貌は

美しくても、無學無教育で、役者や相撲等の月旦以外に何等の理解も趣味もない時代  
おくれの藝者が、自由戀愛に渴せる新時代の男子の新しい性的享樂に對する要求に  
満足を與へられそうな筈はない。こゝに於てか、藝者の代りに女優なる特殊の賣笑婦  
が次第に謳歌され歓迎されるやうになつた。女優とてもその大多數は藝術といふ美名  
を看板にして、その實、矢張り暗中飛躍を試むる處の一種の藝者であるが、併し兎に  
角相當の教育もあれば、また多少ながらも文藝の理解もある。彼等の技藝の未熟拙劣  
なるにも拘はらず、新時代の男子に憧憬せられるのは決して不思議でない。それは恰  
も希臘の古代に於て教育あり文藝に通せる「ヘテレー」といふ高等私娼の當時の政治  
家や學者等に愛されたのと同じである。されば、愛慾生活の上に於ても、女優は從來  
の藝者に代つて新時代の男子の人氣を集め得る資格素質があるから、藝者の時代はい  
つしか變つて、女優全盛の時代に移るべきことは、歐米諸國に於ける社會事實に徴し  
ても明かである。

單に性慾を満足させるだけの公娼や下等の私娼の如きものは、恰も客の食慾のみを  
満足させる簡易食堂や屋臺店と同様であるが、藝者及び女優のような高等賣笑婦は、  
單に肉を賣るだけでなく、洗練された情味ある性的技巧によつて異性の心を捉へ、愛  
慾的遊戯氣分を充分に味はせるだけの才能と經驗とを有つてゐるから、之を料理屋に  
譬ふれば、花月とか紅葉館といふが如き有名なる大料理屋に比すべきものであらう。  
賣笑と料理との兩者は、人類の原始本能たる性慾と食慾とを満足する他に之を遊戯化  
し享樂化せしむる點に於て共通性を有つてゐる。文化の進歩するにつれてその窮屈さ  
より一時なりとも脱却して自由なる遊戯享樂氣分を味はんとする文化人の傾向は、食  
慾に於ても性慾に於ても、デリケートとなつて、その對象の精緻繊細なるを欲求する  
がため、料理屋の料理も、賣笑婦の賣笑もそれに伴うて愈々デリケートとならざるを  
得ないのである。

然るに我が日本の婦人は「夫婦別あり」とか「男女七歳にして席を同ふせず」とか

いふような窮屈峻嚴なるストイック的道德に支配せられ、上品一點張り威嚴を作ることを女徳と心得てゐるものが多いから、良家の婦人の大多數は、性的に無智無技巧であつて、特殊の性刺戟と享樂とを要求する男子に満足と與へることが出来ない。家庭の主婦としては女大學式の貞淑謹厚なる女性を要望する男子が、一面に於て藝者を好み、待合遊びを喜ぶが如き矛盾撞着の行爲のあるのも決して恠しむに足らない。藝妓、女優の如き高等賣笑婦の横行して、男子の不品行が道德上の微罪として寛容せられてゐるのも、その元はといへば、從來良家の婦人たるべき女性が、あまりに性的無技巧なるがためである。私は固より良家の婦人に對して職業的賣笑婦の如き者の輩にならへよと云ふような極端な言を弄しないが、併し良妻賢母たる以外に、その夫たる男子を擒縦して愛慾生活の享樂を家庭に於て味はしむべき素養があつて欲しいと思ふ。道學先生や宗教家は、家庭の不和、男子の不身持に對する毎に、單に道德方面から非難するが常で、隱微な、デリケートな性的生活の方面に就ては何等考へようとも

しない。人間の愛慾には野性の伴ひ、享樂氣分の加はることを知らなければならぬ。御上品一點張りの生花式茶の湯式で性的生活にも満足を得ることが出来るものによつて思つてゐるのは世間知らずの腐儒的管見に過ぎない。

#### 四

以上述べた如く、生存に餘裕のある人間に於ては、その本能の欲求に對して特殊の遊びや戯れをなし、人生を享樂せんとする傾向のある他に、普通健全なる人に於ても、異性に對する感興や情熱の昂まつた場合には、矢張り動物界に認められるような暴虐的行爲の演ぜられることをも考慮の中に入れねばならぬ。雄鶏が交尾の際、雌の頸や後頭を啄いて傷け、種馬や種牛の雄が屢々雌に噛みつくが如きことは周知の事實で、此の如き暴行は異性を獲得した勝や、その征服に對する感興的衝動より起るものであるが、雌の方に於ても異性より暴行を受けることによつて益々情熱の亢進増盛す

る傾向がある。人間にても愛人同志が互ひに股を捻り或は頬に噛みついたりして愛情を表示し或は之を増進することは、誰れも知悉する處で、江戸時代の情歌に『振りや紫、咬みつきや紅よ、色で仕上げた此からだ』といふのがある。夫婦間に絶えず喧嘩して口論だけでは承知が出来ず、打つたり、擲つたり、果ては刃物を振りまわすような者も世に尠くは無いが、此様な夫婦自身はその口論喧嘩に相當の理由をつけて居るにしても、互ひに暴虐なる行爲を試み、或は他より虐待せられることによつて特殊の性的興奮と感興とをよぼえ、そのため却て夫婦間の愛情の濃厚となる傾向があるもので、外觀では如何にも夫婦仲が甚だ悪いように見えて、その實却て情交の深いものが多いのである。此の如く愛人同志又は夫婦間にて行はるゝ暴虐行爲も亦た一種の愛慾的遊戯に外ならない。處が病的の人間になると、這般の遊戯が眞剣に行はれ、熱狂となつて甚しい残忍性を帯びてくる。男子にては相手の女をサントクに毆打し或はその腕を捻ち上げ、或は頭髮をむしり或は刃物で切りつけたりなごして多大の苦痛を興

へ、その叫喚する聲を聞き、或はその苦惱する有様を見て、無上の快樂をよぼえ、甚しきは異性を殺して、淋漓と迸り出づる血液を吸ひ或は皮肉を割きて内臓を食し、それによつて性的満足をおぼえるような極端なものさへある。此の如く異性を虐待凌辱しなければ性慾の満足の出来ない變態現象を、虐待性淫亂症（サヂスムス Sadismus）と稱する。之に反して相手の異性より鞭笞せられ、傷つけられなごして甚しい虐待を受け苦痛を甘受することによつて性的快樂を感じる變態性慾を被虐待淫亂症（マンヒスムス Masochismus）といふ。それ故、此の如き變態性慾者にては、決して相手の異性が憎いので虐待するのでは無く、また虐待される側ではそれを恐怖することは無く、寧ろ進んで虐待を要求するのであるから、外觀的に妻を虐待する夫、夫から虐待せられる妻の方が、世間並みにおとなしく平和に暮らしてゐる夫婦よりも、その内實は却つて睦ましいやうな反對事が多い。

抑々暴虐と快感との兩者に一定の關係あることは疑ひなき處で、ロンブローゾは、

軍人の戦場に於て劫掠虐殺を行ふ際、常に野獸的快感が催起すると云つたマンテガツ  
ツアの説を挙げた。戦闘正に酣にして興奮の絶頂に達した時、意識内に一種名状す  
べからざる快感の發動することは、獨逸の一軍人の嘗て叙述した左の記事を一讀して  
推知し得られる。

Und als nun erschallt das Zeichen, — beide Heere sich erreichen — Brust an  
Brust — Götterlust ! herüber, hinüber — jetzt Feinde, jetzt Brüder — streckt  
der Mordstahl nieder — Empfangen und Geben den Tod und das Leben — im  
wechselnden Tausch — wild tammel — und im Rausch !

敵を傷つけその肉體から生まゝしい血潮が泉のように溢れ出るのを見、或は苦痛  
のために悶え苦しむ有様やらを見て快感をおぼえることは戦場に於ける軍人の往々體  
験する處であるが、彼の好んで人を殺傷する暴君の殘酷行爲も要するに之によつて  
自己の威力を示し、支配慾に満足を與へて愉快がると共に他の一面には凡てその對者

を虐待してその苦悶するさまを見ることが一種特殊の快感を催起するに因るのであ  
る。

普通の人間にても前述の如く多少とも、「ザヂスムス」及び「マンヒスムス」の傾向が  
あるから、ザヂスムスの傾向の強い男子ならば、甘んじてその虐待を受くべき意氣地  
の無い、抵抗に乏しい異性に憧憬し、これに反して「マンヒスムス」的傾向の濃厚な  
る男子ならば、自己を支配驅使すべき冷酷陰險放縱倒慢なる異性を喜ぶものである。  
さりながら、謹嚴上品なる女性を妻とするものは、家庭に於て此の如き變態的要求を  
充たすことが出来ないがため、自己の愛慾の満足と享樂とを充たしてくれる女性をば  
家庭外に求めるようになるのである。

上記の如き愛慾的遊戯のある以外に、人間、殊に男子にては冒險的傾向があつて、  
恰も平々坦々なる道路を歩くよりも險阻なる峻坂を攀づることを快とするが如くに、  
單調なる家庭生活と見馴れた妻女とによつて慰藉を求めるよりも、人眼の關を忍んで

變つた女と戀の經路をたどる方に興味の多きを感じるものも尠く無い。姦通、放蕩の如き不倫行爲が此の如き男子によつて行はるゝことは否むべからざる事實である。

## 五

嚴肅なる道徳家宗教家より見れば「愛慾に狂ふ痴人」と認むべき人間が到る處に見出される。しかし、それが人間社會の實相だから致方が無い。窮屈な文化生活、道徳生活より一時なりとも脱却して自然の野性に還らんとする本能的傾向、それに特殊な好奇的刺戟を求めて人生を享樂せんとする傾向は實に愛慾に狂ふ痴人の簇出する原因である。平和な無變化な愛の生活に物足らなさと倦怠を感じて感溺状態に墮するもの、愛慾的遊戯の昂じて眞劍熱烈なる狂亂状態に陥るもの、糜爛しきつた耽溺生活に疲勞して鈍麻した神經をば更に異常に興奮せしめんがために新奇なる刺戟を追ふもの、愛的感溺の反動の結果、異性に極端なる憎惡の念を抱いて、愛の敗者たる復讐を

試むもの等、一々擧ぐるに堪へない程、愛慾に狂ふ痴人の到る所に蠢動してゐるのが人間社會の實相であつて、いづれも愛慾的遊戯の基調となり源泉となれる變態現象に外ならない。

## 娼婦型の女性

—

「貞操は男子にては人爲的なれども女子にては自然である」 Die eheliche Treue ist dem Manne künstlich, dem Weibe jedoch natürlich といつたショーペンハウエルの言は、實に男女兩性間に於ける性的生活の真相を的確に道破した名言である。蓋し男子は一年間に百人の子供をも作り得る可能性があるから、一夫多妻の傾向があり、之に反して、女子は如何に幾多の異性に接しても、一年間に一人の子供を生み得るに過ぎないから、一夫一婦の傾向を有つてゐる。従つて女子に於ける性慾が男子に比して遙かに弱いことも、これ亦た自然の傾向である。這般の事實は婦人科學者たるヘーガール、リッツマン、ナルト、キツシユ等の夙に唱説せる處で、女子は愛情が強く戀を生

命とするものであつても、而かもその愛は主として精神的であつて、肉體を主とするものでないといはれ(リッツマン)また身體の强健なる女子にして性交を嫌忌し、その戀着せる愛人にさへ肉體を許すことを厭ふものもあると云はれ(ヘーガール)てゐる位である。エルプ、レーウエンフェルド等の如き神經病者も亦た同様に、女子には男子よりも性慾の興奮を來たすことが少く、従て肉的要求の弱きことを認めてゐる。ことにクラフトエビングの如きは下記の如くに論唱した。精神が健全で且つ教養ある女子に於ては、肉的要求の少いものである。若し然うでなかつたならば、全世界は遊廓となり、一家は破壊せらるゝであらう。女子を厭忌する男子と同様に、性的享樂に憂き身をやつすやうな女子は、共に異常の現象である。女子が愛への努力は、男子に比して遙かに強く、且つ連続的であるが、併し、その愛は主として精神的であつて、肉的要求の要素に乏しいものである。男子は最初は女子を女子として愛し、次にはその子供のみとして愛するけれども、女子に於ては、その子の父として、次には夫として男子を

愛する。そして母性愛の前には肉慾は消失する。夫婦の契りに於ても、女子は自己の肉慾の満足よりも、寧ろ夫に對する愛の證示と信愛とのために行ふことが多い。女子はその精神全體を以て愛するもので、即ち愛はその生命であるが、男子に於ては愛は生活の享樂に外ならない。女子の精神的傾向は一夫一婦的であり、之に反して男子は一夫多妻的である」と。

ロムプロソーも、女子が男子を愛するのは、性的衝動のためでは無くして、その環境に對する順應によつて獲得したる服従と犠牲との本能に基づくこと云ひ、また女性の男子に對する愛情は母性の第二次的性質に外ならざることを説き、子を得んとする母性的本能より男子に身を委するものであると云つた。ヘーガルも多くの女は二三の兒供を生んで既に母性の満足を得ると、肉慾を忘るゝものであると説いた。ニーツエーも「女子にとつては、男子は一手段である。女子の目的は子である」Der Mann ist für das Weib nur Mittel, der Zweck ist immer das Kind と云つた。女性に對する有

名の研究家で、その「三十の美」を記述したデバイも、女子の性慾の弱きことを述べ「若し婦人が墮落した場合でも、それを肉慾に歸してはならない。愛情、空想或は虚榮こそ常に婦人を墮落せしめる原因である」と云つた。またエレン・ケイも女子の愛は多くは靈より肉に入るが、之に反して男子の愛は肉より靈に入ることが多いと云ひ、フレッシユも男子に於ても性的結合は、その性慾の満足のためであるが、女子にては母性たらんがためであると云つた。

然るに所謂新しい婦人の中には、女子の性慾が男子に比して異ならざることを説き貞操を奴隸的道德と罵つて性の解放を主唱し、果ては「女子は、いつも性的に餓へてゐる」Das Weib hungert immer geschlechtlich など臆面もなく高調する者もある。併し此の如き説はキツシユの論じたが如く、要するに自他を欺むくもので、健全なる女子の眞感覺を言明せるものでなく、近代女性の「デカダン」的病理現象に外ならな



以上叙述したる處を綜括すれば、精神が健全にして且つ教養ある婦人に於ては、性慾は一般に弱く、その異性に對する愛情は、主に精神的であつて、肉的要求に乏しく、子を生まんことを要望する母性本能と、夫に對する愛情の表示とのために性的結合を行ふことが多いので、即ち女性の真相は母性型の女性であると謂はねばならぬ。されば女子にして、性慾の異常に強く、受動的の本性より脱却して自から進んで異性に媚を求め嬌態を恣にし、性慾の満足のためには幾多の異性に接しても何等意に介せざるが如きものは、所謂娼婦型の女性で、私共より觀れば全く病理的女性である。此の如きものは持続性に或は發作性に性慾が發揚して著しく過敏旺盛となり、羞恥感覺が減退し或は缺乏して放縱無拘束の生活を送るもので、その甚しきものは「ニンフォマニヤ」或は「マントルハイト」Nymphomanie, Manntollheit と稱せられる。此の如き女

性は、主に變質者、ヒステリー及び躁病者に認められる處で、一夫のみにては満足することが出來ず、常に扮装を凝らして外出徘徊し、多數の情夫をつくり或は進んで賣笑婦となるものも多い。併し茲に注目すべきことは、温雅柔順の性質の者でありながら意外にも性慾が異常に強く、淫蕩を極むる者のあることである。私はその一實例として、佛國の醫家トレラの千八百八十九年世に公にした一女性を擧げてみよう。

千八百五十四年の頃、トレラの許に來りし一婦人があつた。それは六十餘歳の老婦で、温厚謙遜の性質なるが上にも非常な努力家で、寢食をも忘れて仕事をする程である。それ故その舉動及び行爲の上より見ると、どうしても品性の立派なる老婦人と思はれなかつたが、何ぞ圖らん、非常なる淫婦であつて、遂に癲狂院に收容せられることになつた、彼女は既に少女より身を持ち崩して兩親に心配ばかりをかけた。しかし、その性質は至つて内氣であつて、多勢男子の居る場所で男から言葉をかけられるやうなことがあると、直ぐ顔を眞つ赤にして碌に返事も出來ぬ程であるが、然るに

若し男と二人ぎりになると、その相手の男が老人であらうが、少年であらうが、そんな事に頓着なく、進んで挑発的態度に出で、恥づかしがりの少女は忽ちにして淫婦に化するのであつた。そこで両親は結婚させたならば、此の厭悪すべき醜癖が改まるのであらうと思つて、或る家に嫁せしめた處、依然としてその多情の性質は治らなかつた。夫の眼を偷んでいろ／＼の男を密夫にもち、甚しきは街上で偶然邂逅した未知の男子に對しても、生徒であらうが、労働者であらうが、毫も差別なしに例の挑発的態度を執つた。そのため屢々男の方より殴打せられ、罵言せられた時としては懷中物を盗まれたこともあつたが、それに懲りもせずして幾度も醜行を繰りかへし、年老いて孫の顔を見るやうになつても、その行狀を改悛することが出來ずに相手の男を探しまはつてゐた。或日のこと、彼女は途上で偶然十二歳ばかりの男の兒に出逢つた。お前さんの阿母様が私の宅へ來るから、お前さんも來るが可いと言葉巧みに欺むいて自宅へ連れ歸り、いろ／＼な菓子などを與へた後、自からこの男の兒の衣服を脱がせ、

突然怪しかる舉動に及んだ。少年はそのあまりなる無禮無法を憤つて、サント／＼彼女を殴打した後、吾家へ馳せ歸つて父兄にその由を告げた。そこで兄は彼女の家へ押しかけてその醜行を罵り、今後左様な振舞をしたならば容赦せぬぞときめつけて居る處へ、彼女の聲なる男が突然やつてきて、委細の事情を知り、今更ながら義母の醜態に呆れて遂に尼寺に託することにしたが、併し、その後も彼女の汚行が改まらぬので遂に精神病院に入れた。

三

西鶴の「好色一代女」の主人公も、心ばえの優しい女であるが、肉に生きて肉に死んだ大の淫婦であつた。性的に早熟であつた彼女は十三歳の時、同じく宮仕へをしてゐた青侍と戀に落ちて、それが露顯した結果、男は手打ちにされたが、彼女は幸ひにも赦された。當座の間は、慘ましい初戀の記憶が彼女の小さい胸を惱やましたし、し

かし多情な彼女は何時しかそれを忘れて了つて、宮廷を追ひ出されてから後は踊り子となり、華やかな生活を送つてゐるうちに、間もなく或る優さ男と通じた。偶ま江戸詰のさる大名が美しい女を求めたので、彼女は之に應じ、百七十餘人の候補者の中より選拔せられて、一躍大名の寵妾となり、榮華の限りをつくしたが、殿様が次第に瘦せ衰へるので、彼女のあるがためぞと、思ひの外に人より疑はれて親許へ送りかへされた。そこで、彼女は鳥原の遊廓に身を賣つて全盛を謳はるゝ太夫となつたが、しかしそれも長くは續かず、太夫から天神、天神から圍ひへと身を落して、果ては鳥原を出で、大阪は新町の娼婦となつた。二年の勤めを終へた後、ある僧侶の大黒となつて抹香臭い寺院に燻ぶつてゐたが、やがて其處を飛び出して女祐筆となり、艶書の代筆を頼みに來た男を挑んで再び身を持ち崩した。その後は處女らしく装ふて呉服屋の女中となつたこともあり、江戸に下つて或る屋敷の表使ひになつたりした。さすがに墮落しきつた自分の身の上に愛想がつきて、尼にならうとまで思ひつめたこともあつた

が、併しそれも一時の氣紛れに過ぎなかつた。それから、彼女の境遇は走馬燈の如くに變轉し、歌比丘尼、お屋敷の御梳、御物師、茶の間女、妾奉公等となり、人に迫られて艶書を書く時にも「われ定まる男なければ、いたづらは神佛も許し玉へ」と臆面もなく露骨に自己の墮落氣質を表白した程、彼女の血管には淫蕩の血が漲つてゐた。かくして彼女は益々淪落の淵に近づき、都の茶屋者に成り下つた後にも或は下屋敷の妾となり、或は扇屋のかみさんとなつたやうな好運に見舞はれたこともあつたが、併し多情なる彼女には、斯様な生活が長く續かず、その後には風呂屋女より、蓮葉女、遣手奉公にまで成り、果ては六十五歳の皺くちや婆になつても、紅白粉でそれを塗りかくして場末の陋巷に日傭や馬子を顧客とする夜鷹にまで落ちぶれたのである。

彼女が十三歳の少女時代より六十五歳の老婆となるまでに弄んだ男の数が數萬人とあるのは、西鶴の誇張としても併し彼女は一日も男なくしては生きて居られないと云ふ淫婦であつて、いつも自分より進んで男子を挑發誘惑した。彼女にはその生活を律

する良心も無ければ道徳もなく、唯だ性の衝動に驅られて爛熟しきつた生活を送り、その一生を肉の奉仕に終始したのであつた。

上記の「好色一代女」は西鶴の空想より描かれた者であるにもせよ、此様な淫婦が西鶴の生存時代にあつたればこそ這般の作に筆を染めたことと思はれる。「好色五人女」の巻の三にも、當時代に於ける女性の淫蕩の風俗を叙して「色咄しに現をぬかし道頓堀の作り狂言をまこと見なし、いつともなく心を亂し、天王寺の櫻の散り前、藤の棚の盛りに、うるはしき男にうかれ、歸りては一代養ふ男を嫌ひぬ。それより萬づの始末心を捨て、火焚きする竈を見ず、鹽が水になるやら、いらぬ處に油火をともすも構はず、身代も薄くなりて暇の明くを待ちかねける云々」とある。

#### 四

空想的産物の「好色一代女」ほどでは無いが、その類型と看做すべき實在の大淫婦

には、江戸時代の文化文政時代に土器お傳といふのがあつた。三代目阪東三津五郎（秀佳）の女房であつたが、多数の俳優や藝人と私通して荒淫放縱の生活を送り、江戸四里四方の大評判となつたので、利を射るに敏なる出版屋はその情夫の全部を變名にして顔見世番附に擬し、その似顔を歌川國貞に畫かせて發賣し、二百金以上の利益を占めた。それを見ると、情夫の瀬川菊之丞を瀬川いくの丞、岩井久米三郎を岩見久米三郎、岩井半四郎を岩見伴四郎とあるやうに本名を少しく變へてあるが、それに列擧された男の數だけでも五十餘人を算する。なほこれ以外に關係した男の數も多く、情夫の總數九十人に達したとも傳へられてゐる。

性慾の異常に旺盛なるがために好んで賣笑婦の群に入る者もある。市場學而郎氏の「賣笑婦研究」の中に記載せる宮下ユキといへる娼妓の如きは實にその一例である。

彼女は農家に生れ、その両親の質朴なるにも似もやらず、十四五歳の頃より男狂ひに憂き身をやつし、惡い噂が立つたので、父親は彼女を携へて上京し、某商家に奉公

せしめたが、彼女は之を嫌やがり、自ら求めて吉原遊廓内の揚屋町松大黒樓に奉公し、父を欺いて同樓に招き寄せ、遂に父に迫つて娼妓となるべき同意を求め、六ヶ年の年期にて同樓の娼妓となつたが、飽までも淫蕩なる彼女は約束の年期を終へたにも拘はらず、なほ二年を増したとのことである。明治大正時代の妖婦として名高い本庄幽蘭(本名久代)も一時自ら進んで吉原の娼妓にならうとしたことがある。彼女はその關係した男子を頻繁に取りかへ、その男の數八十餘名、亭主を代へたこと十九回に及んだとある。そして彼女は一度でも關係した男の名を必ず書きとめ、「金蘭帳」と稱する一冊の帳面を所持してゐたさうである。その中には下等俳優、會社員、新聞記者等の他に外國人もあると云ふ話もある。彼女は嘗て九州毎日新聞の紙上に「赤裸々の懺悔」といへる自己の告白を掲げてその關係した男子のことを隠面もなく書いたことがある。

古今東西の史上や雜著を讀んでみても、女性でありながら淫蕩放縱を極めた者が決

して稀でない。彼の羅馬古代の女皇メッサリナの如きは、その最も顯著なるもので、至尊の地位にありながら、賣笑婦に等しき醜狀を恣にした。また史上に有名なる妖艶の美人として知られてゐる埃及の女王クレオパトラの如きも亦た此種の女性で、キツシュの著書「女子の性生活」Kisch, Das Geschlechts leben des Weibes 中に記する處に依れば、彼女の情夫のアントニウスが醫士ソラヌスに贈つて書簡のうちには、クレオパトラが非常の淫婦で、一旗亭に於て百〇六人の男子に接したと云ふことを記してあつたと云ひ、また世界に名高い埃及のケオプスの「ピラミッド」も、ヘロートの説に依ると、國王の姫君の關係した多數の情夫より建設された者である。またプロッス。バルテルスの記する處に依るに、羅馬古代の貴婦人の中には、ザルヌス祭などで淫事を恣にし、甚しきは神の殿堂に於て肉の切り賣りをしたものもあつた。同じく羅馬の腐敗時代には、アグリッピナの如き淫婦も現はれ、その同胞のカリグラ及びその他の多くの男子と不倫の醜行を敢てした。近世紀に於て特に有名なる淫婦は、露國の女皇

カタリナ二世である。有爲聰明の女性なりしに拘はらず、その行爲は頗る放縱を極め、ソルチコツフ、ポニアトフスキーボテムキン等を情夫となし、また普通の兵卒の如き者をも寵幸した。唐の則天武后の如きも、これと類型の淫婦である。

## 五

更に進んで歐洲諸學者の記述した女性に就て觀察するに、有名なるロンプロソの實驗せし「マントルハイト」の女性中には、教育あり地位ある身分でありながら、職工風情のものを澤山情夫にもつて、讀むに忍びざる猥褻の半紙を興へたものや、立派なる夫のあるにも拘はらず賣笑婦同様の行をなしたものもある。またデヨリーの記せし處に依るに、ある名高き一寡婦は聖書の中に淫畫を挿み、机の抽斗の中には催情劑たる「カンタリヂン」製劑を藏し、多數の屈強なる下等社會の男子を情夫にして之を扶養してゐた。また女性犯人には、性慾の病的に發揚せる者が少く無い。リツカルジ

の調査に依れば、百六十五人の女性犯人の中、九人はいづれも非常なる淫婦で、その中の一人の如きは單に男子を一見したゞけでも忽ち性的興奮を來たすが如きものであつた。またボンバールと云へる有名な女犯人は少女時代より賣笑婦の如き行動をなしたが、嘗てその父に向つて、自分はとても一夫を守ることが出来ないから、一生結婚しないと斷言したといふ。

性慾の強烈なる女子に於ても、一定程度まで自己の意志と理性とを以てその性慾を抑制し得られるのは「性的感覺過敏」Sexuelle Hyperaesthesia とは云ひながら、病著とまでは往かない。しかし、それよりも進んで自制力及び羞恥感覺が滅失し、些細の刺激によつても直ちに衝動的に性慾が興奮發揚して醜態を演ずるものは「ニンフォマニ—」「マルトルハイト」と稱すべき病理的現象である。そしてこの性慾の病的亢進は發作性に起ることもあれば連續性のももある。發作性のものに於ては、その際精神状態は、恰も雲霧にて掩はれた如くに朦朧となり、自制克己の力は消失して了ふ故人目

を憚らず公然の場所に於ても卑猥なる舉動をなして異性を挑發誘誑する。思ふに羅馬古代に於けるメツサリナ等の如き、また吾國の江戸時代に於ける土器お傳の如きは這般の病的な女性であり、また偶然途上にて遭遇した未知の男子と狎戯したり或は自ら進んで賣笑婦の群に入るが多き女性も「ニンフォマニー」か若くは之に近き女性である。

さりながら、彼の花柳界の女性、女優仲間、一部の女文士、貴婦人等の中で男狂ひする者の如きは、或は單純なる性的感覺過敏に基づき、或はその放逸なる無拘束の境遇等に出づる限りは之を以て直ちに病的と看做すことは出来ない。

性慾の病的亢進は、常に壯年の女子に於けるのみならず、また更年期に達したのものにも認められる。史上に顯著なる此種の女性は、ニノー・ド・ランクロであつて、九十歳の高齡に至つても、なほ美貌を失はず、六十五歳の時、青年の男と熱烈なる戀に落ち、その男が彼女の息子であつたことが判かつた時、男は自殺した。彼女の七十歳になつた時にも、青年アツペーは彼女を戀したといふ説話がある。さりながら更年期に

於ける性慾の亢進には、肉體的刺戟に起因する者もある。クラフトエビングの説に依れば、更年期には屢々痒疹を生ずるがためにその刺戟によつて性慾の著るしく興奮することがあるが、併しそれは主として神経病質性の女子に於て認むる處である。マグナは神経病性なりし一婦人が發作的に拂曉に於て驚くべき性的興奮に襲はれたことを報告した。又ベルネルは更年期に於て性慾が異常に亢進せる婦人に於て屢々子宮の屈曲或は纖維腫の發生を認めたことがある。しかし此等の末梢的刺戟によつて性慾が興奮するものは、その原因たる刺戟を除去したならば、自ら常態に復するものであるが、之に反して、精神の病的缺陷に基因する處の性慾の異常亢盛は、その原病たる變質的精神病、ヒステリー、躁病等の治癒しない限りは正常に復しない。

## 先天的賣笑婦

### 一

近代に於ける賣笑の主なる原因が社會的經濟的原因に因る處の生活難にあることは、周知の事實であつて、佛國の學者バラン、デュシャトリーの説に依るも、巴里に於ける賣笑婦五千一百八十三人中、千四百四十一人は生計の困難に因り、千二百二十五人は兩親の死亡、或は放棄等によつて醜業を營むの已むなきに至つたことを記した。しかしまた他の一面には、無垢なる處女が誘拐者の巧辯甘辭に欺かれて賣笑婦の群に入ることもあり。また我國では一家の貧窮を救はんがためにその娘を賣笑婦とならしめることもあり、娘自身も兩親のために身を賣ることを孝行と心得てゐるが如き事情もあるが、併しこのやうな女性は、要するに一家の生計の困難であるがため、相

當の教育を受くることが出來ず、随つて品性が低劣で世に處するの道を解せず、自制力乏しくして外部の誘惑に應じ易く、輕佻懶惰にして生業に従事することを好まないがため、醜業を營むやうになるものが多い。つまり生計の困難が凡ての事情の下に於て賣笑婦たるに適する女子を驅つて醜業に従事せしめるに因るのである。

生來羞恥感情の強い女性が荒んだ賣笑生活に入るのは、前記の如く生活難と、之に基づく教育の不足、品性の低劣とに因るの外、道德的及び精神的缺陷に由來することも稀でない。ミュルレルが賣笑の本來の原因を精神的變質に歸し、社會的境遇から賣笑婦となるのを第二の原因に過ぎないと云つたのは、一般に當て嵌らない偏見であるにしても、賣笑婦に精神的缺陷を有する者の尠く無いことは否定すべからざる處である。例之ばシツヘルの説に依るに百五十二人の醜業婦の中、精神の普通なるものは僅に二八・三%位に過ぎず、六八・四%は精神異常者で、その中、最も多きを占めてゐるのは低能、これに次でヒステリー、癲癩、早發痴呆等であるといひ、トーマスも三百



二十人の賣笑婦を検査して、その六〇・四％は軽度の精神病者であり、その他のものと雖精神の普通でないことを認めた。私は未だ此種の方面に關する精細の調査を遂げてゐないが、しかし藝娼妓、酌婦等の兩親中には、博徒、大酒家、放蕩漢、微毒病者、悖德者等を見出すことが稀有でなく、随つて彼等賣笑婦に不良低能の遺傳を有する者の尠く無いことが容易に認容される。既に然りとせば、一家の貧困のために賣笑婦になるにしても、それは要するに一の誘因であつて彼等には遺傳に因る不良低能の素因の存するがために醜業の邪道に入るといふ方が妥當であらう。

私は賣笑婦の全體を以て悉く精神的低格者と看做すもので無いが。しかし、また此種の異常者の尠くないことを認める。その中にも茲に敍説したのは、ロンブロー及びその門派によつて唱へられた、所謂先天的賣笑婦 *Geborene Prostituirten* である。これは外部の誘因によつて醜業を營むのでは無く、内的素因、即ち精神的缺陷のあるがために自ら好んで醜業婦となるもので、その特性は實に道德的觀念の缺乏である。

所謂悖德狂と稱すべき精神變質者であつて、賣笑婦の中、此種の異常者の稀有でないことは、ロンブローの夙に説いた處である。

二

抑々悖德狂、即ち「道德的白痴」の指定徴候と云ふべきは羞恥感情の缺乏である。

先天的に道德觀念の發育せざる女性にありては、羞恥の感も無いがため、賣笑を醜業とも思はず、犯罪を悪行とも感せず、浮華虚榮の利己的感情を充たすがためには肉を賣り罪を犯しても何等意に介しない。その自ら好んで賣笑婦となるのは必ずしも淫縱なるがためでなく、羞恥感情に缺乏してゐると、勞働せずして金錢を得んとする懶惰根性とに因るのである。ロンブローの説に依れば、先天的賣笑婦の多くは概して性的に冷淡であつて、それがため頻繁の醜行に堪へることが出来るのである。また彼等が既に少女時代の頃から醜業に従事して早熟の觀を呈するものも、必ずしもその性慾

の早發に因るのでは無く、生來道德觀念、羞恥感情の缺乏せるがため、夙に兒童時代より惡事醜行に耽り易き傾向の致す處である。

先天的賣笑婦に共通せる特性は道德觀念、羞恥感情の缺損の他、勞働を死の如くに嫌忌し、怠惰放逸の生活を送りながら物質的享樂に飽かんとする性情であつて、彼等が醜業婦となる主要の動機は實に這箇の性情に由來する。 balan、ジュシヤトレーも賣笑の主要原因を怠惰となしタルノフスカヂヤも最低最惡の賣笑婦の生活状態を記して「食すること、飲むこと、及び眠ることが彼等の唯一の喜びである」といひ、勞働の嫌忌、無思慮、不規則の飲食が彼等社會の常態なることを指摘し、彼等は賣笑稼業が眞面目なる勞働を要しないので、却て之を幸福に感ずるものゝ多いことをも附記した。そして同氏の検査した賣笑婦の殆どすべては、一度は勞働すべく企てたこともあつたが直ちに之を嫌つて醜業に轉じたものであつた。ヂユ、カンブは嘗て巴里の警察署に於て、賣笑婦を鞫問したことがあつたが、無恥無考慮なる彼女達の答はいつも次

の如きものであつた。

(問)お前は生活を變へたいと思はないか

(答)いやです

(問)家に歸りたくないか

(答)いやです

(問)賣笑婦簿名に登録せられたいか

(監視を受けること)

(答)それも、いやです

この問答を見ても、荒み切つたあばづれの賣笑婦がいかにもその醜業に對して全然無恥無反省なるかを窺知することが出来る。

先天賣笑婦は精神的缺陷のあると共に、その身體にも、齒牙の異常、口蓋分裂、顔面の左右不齊、毛髮異常の如き變質徴候を有する者が尠く無い。これ實にロンブローの先天賣笑婦の定型と看做した身體的徴候である。併し這般の身體異常は普通の婦人の中にも往々認められるから、イワン、ブロッホの如きは、「先天賣笑」なる言葉の妥當にあらずして、寧ろ「先天的變質者」と稱すべきを云つた。さりながら、先天的變質必しも賣笑婦となるので無く、また身體に變質的徴候のある賣笑婦必しも先天的變質者といふことは出来ない。蓋し彼等の身體に認められる異常の多くは、寧ろ醜業の結果と看做すべき者で、夙にバラン、ヂュシャトレーも賣笑婦に於ける身心の異常は、その賣笑生活に基因せる變化なることを述べ、グイレーは彼等が多くの異に接觸する結果、多少男性的の性質に變化し、また、日常男子と相會して飲酒喫煙するがために音聲は粗濁となり、また平素眼筋を働かせて嫖客を惱殺するに努めるがため眼球は突出して鋭くなるのであり、且つ放縱なる生活や、性病の傳染等も彼等の身

心に著るしい惡影響を及ぼして種々の異常變化を惹起するに至ることを述べた。されば賣笑婦に於ける身心の異常を以て直ちに生來の變質徴候と看做すことは出来ない。ロンブロー自身も「すべての賣笑婦は悉く道德的白痴にあらず、即ち悉く先天賣婦にあらず」といひ、所謂「機會的賣笑婦」の尠く無いことを認めてゐる。機會的賣笑婦 *Gelegenheitsprostituirten* とは誘拐、窮乏、自暴自棄等のために賣笑生活に入るもので、此の如きものはその最初は醜業の邪道に墮したのを恥ぢ、賣笑稼業を繼續するを欲しないが、併し不知不識の裡に一步一步泥池に入りこんで厚顏無恥となり、更に飲酒、欺瞞放縱等の慣習は益々彼等が無恥無反省の女性たらしめ、衝動性となり發揚性となつて、その氣質の著るしく變化するのみならず、飲酒喫煙、不攝生の生活、性病の傳染等のために身體に種々の異常變化を來たすに至るのである。されば彼等がその身心共に頽廢して所謂變質徴候を呈し、普通の女性と著るしく相違するやうになるも、畢竟その環境の然らしめる處で、必ずしも悉く先天的の原因に基づくものでな

い。生來悪性不良の遺傳があつて道德感覺の缺乏せるがために醜業を敢てする先天賣笑婦のあることは固より争はれないが、しかし、身心の變質徴候を以て直ちに先天賣笑婦に特殊のものと認める譯には往かない。

これを要するに先天的賣笑婦の本性は道德的白痴であつて、必ずしも性慾の亢盛に基因するのではなく、寧ろ性的冷淡なるが普通で、たゞその羞恥感情の缺乏と、勞働せずして金錢を獲んとする懶惰根性とのため、自から好んで賣笑生活に入るものである。

### 微毒に傳染したるシヨーベンハウエル

人の知るが如く、シヨーベンハウエルは前世紀の獨逸の哲學界に一異彩を放つた學者で、厭世論を主唱し、人生を以て苦痛罪惡の巷と觀じた人である。而して他の一方には、有名なる婦人論を公にして、女性を忌憚なく攻撃したこともあり、七十有餘年の一生を通じて、獨身生活で身を終つた程の人物たるにも拘はらず、其の壯年時代に於て、俗人と雖も覺する微毒に罹つた事實は、嘗て獨逸の醫學者イワン・プロツホの考證に依つて闡明せられ、且つ微毒の傳染がシヨーベンハウエルの厭世思想に影響を及ぼしたことが認められるやうになつたのは、多少興味ある事柄である。

千八百二十四年五月二十一日、シヨーベンハウエルが獨逸のミュンヘンより友人フリードライヒに宛て、送つた手紙の中には、次の如き文句がある。

一年前、當地に參り候が、其後六週頃より引續きに病起り、一冬を家にのみ暮らし

甚しく悩み申候。一ヶ月以來恢復致候へども、猶ほ神經衰弱に悩み、今し漸く君の御書信に對して返書を認むるにも、手打震ひて甚だ困難を感じ候。身體倦怠し、晝間は睡眠を貪はり、右の耳は全く聾となり候。されば、有名なる南塊ガスタイン温泉に赴き静養せばやと存居候湯治を終り候は、再び當地に立ち歸るべく候へども、此地獄の如き恐ろしき風土の地には再び滞在致すまじく、ラインに行きて其處に夏を過ごし、體力の恢復に従ふ所存に有之候云々。(意譯)

(原文) Vor einem Jahre kam ich hierher, und etwas sechs Wochen darauf fing eine Verkettung von Krankheiten an,... ich habe den ganzen Winter in der Winter in der Stube zugebracht und sehr gelitten. Seit einem Monate bin ich hergestellt, aber noch so nervenschwach, dass ich, vor Zittern der Hände erst jetzt Thren Brief und zwar mit vieler Mühe beantwortet kann, mich matt dahinschleppen und bei Tage einschlafe;dabei ist das rechte Ohr ganz taub. Allen dieselben Uebeln

soll soll das berühmte Bad Gastein in Süd-Oesterreich abhelfen ..... Nach der Badkur muss ich hierher zurück, werde ich aber diesem Höllenklima dann nicht wieder aufhalte, sondern an der Rhein gehen, dort den Semmer und die Wiederkehr meiner Kräfte zu geniessen.

メビウスは、上記の手紙の文に徴して恐くは窒扶斯に罹つたのであらうとの推測を下した。(Möbius, Ueber Schopenhauer. 1899) 然るに其後、イワン・プロツホは、シヨーベンハウエルの遺書を精細に調査して、その手控を見た處が、鉛筆を以て次の如く記載してあるのを見出した。(Iwan Bloch, Medizinische Klinik. 1906)

赤降永 十月十四日より

二、五グラン

四グラン

十月二十二日迄

〇、五グラン

四グラン 十月二十八日迄  
 同 十一月一日迄  
 同 十一月九日迄  
 同 十一月十三日迄  
 同 十一月十七日迄  
 同 十一月二十五日迄  
 同 十二月三日迄  
 同 十二月七日迄  
 同 十二月十一日迄  
 同 十二月十五日迄  
 同 十二月二十二日迄  
 六七半グラン

昇汞一六グラン

其の次にはインクで左の如く記してあつた。

余は二三回塗擦をなせり。初めの四日は毎日次で一日休み、それより隔日、殆ど三十日間云々。

終りに鉛筆で「瘡瘡木丁幾」と書簡袋に記載してあつた。

上記の事實に據れば、シヨーベンハウエルが殆ど七十餘日に亘つて驅微療法を行つたことは明かで、従つて微毒に罹つてゐたことが判る。プロツホの説では、最初は水銀軟膏の塗擦を行つたが、効果が見えなかつたがため、赤降汞を内服したのであらうと言つた。赤降汞は當時頑固陳舊なる微毒に用ひられたもので、十六世紀時代の頃より使用せられたが、千八百〇八年に至つて、ベルグが再び之を賞し、毎日一グラン（〇、〇六瓦）を内服せしめ、十乃至十二週にして効を奏することを認めた。而して此の藥劑を特に慢性頑固の微毒に用ひて著効があつたと云ふことは、當時有名なる醫家

フフエランドを始め、ホルン、リツテル等の認めた處である。またハツセも同様に多數の陳舊頑固の微毒患者に用ひて著しき効果を收め、且つ之と共に瘡瘡木丁幾を用ひて、其の効力を強めたといふことである。是に由つて之を見れば、シヨールペンハウエルが赤降汞を内用したのは、頑固陳舊なる微毒のためであつたことが推測し得られる。この他猶ほ昇汞を用ひて其の量十六格蘭（〇、九六瓦）に達し、また最後には瘡瘡木丁幾をも用ひたのである。右の他、彼が遺して置いた手控の中には、醫士の往診を受けたことが百二十回、醫家の門を訪うたことが七回あつたことを明記してある。

彼の病は可なり長かつた。即ち千八百二十三年五月下旬、伊太利からミュンヘンに歸り、六週の後、即ち七月の中旬になつて、病が引續いて起り、そのため冬を家で送り、千八百二十四年の二月に至つて恢復した。さて「引續いて病が起り」といへる文字あるを見ると、彼は微毒の他、猶ほ他の急性症に罹つたことが明かである。如何なる症であつたか確かに分らぬが、メビウスは腸窒扶斯であらうと推定した。而して

此の病のために右耳は聾となつたのである。彼が千八百五十六年五月一日、フラウエンステートに宛てた書翰に、今を去ること三十三年前（千八百二十三年）病のために、右耳は全く聽力を失ひ、左耳は常態に留まつたが、四年來より左耳の聽力も漸次減退したことを記してある。而して千八百二十三年、彼の右耳が聾となつたのは、果して微毒に基因したものであるか否かは固より明白で無い。

彼が微毒に傳染したことは確實で、しかも上記の如く赤降汞を内用したのを見れば、餘程以前から微毒を患つてゐたのが判る。此の薬は當時専ら慢性頑固の微毒に用ひられたものであるから、従つて彼の病が慢性頑固の微毒であつたことは瞭である。斯く水銀療法を施した上、更に南澳ガスタインに赴いて湯治をなし、微毒を根本的に治することを得た後は、爾來健康であつたが、遂に七十三歳に至つて肺炎に罹つて永眠したのである。

彼が慢性頑固の微毒に悩んで甚しい苦痛を體驗したことは、彼の厭世思想に影響を

及ぼしたことも尠くは無からうと思はれる。フォルケルトの説に依るに、彼の厭世觀は其の經驗上より割り出されたもので、其の青年時代に於ける苦痛と戦闘との響きである。とまで云つた。メチニコフは十九世紀に於ける三大厭世家バイロン、レオバルデー、及びショーペンハウエルの人生觀は、その病に基いたものであると論じた。果してそれが事實であるか否かは明白で無いが、併し彼が微毒、しかも頑固の微毒に罹つたことが、少くとも其の厭世觀を助成したことは推測するに難くない。

彼が青春時代殊に千八百〇五年より六年頃の時代は、性慾が頗る旺盛であつた。當時彼の作つた「快樂、地獄」O Wohlust, O Hölle の詩は、彼が戀愛の憧憬者であつたことを物語つてゐる。此の點に就いて、メビウス・グリーゼバツハは多くの證據を挙げたことがある。フランウエンステートは述べて曰く「ショーペンハウエルは性慾の點に於ては、決して純潔なる人間では無かつた。彼が私に白狀した處では、女色を好み伊太利にあつた頃は、常に風土の美のみで無く女色の美をも愛玩した。彼の有名

なる著作『愛の哲學』は、實に彼自身の經驗を基としたものであらう。然らずんばあの様な論文を草することが如何にして出来ようか」と。

彼自ら告白した處に依れば、厭世觀を構成したのは實は千八百十三年から千八百十八年の間であつた。固より彼の生來の性格にも因つたものであらうが、併し又彼に深き悩みを與へた特殊の原因がその一要素になつたかも知れない。彼が獨逸のミュンヘンに在つた時、手書したものの中に、下記のやうな文句がある。「あゝ快樂の一年は微風の如くに消え去りぬ。されど不幸の瞬間は苦惱の百年を齎す。」“Aoh, ein Jahr des Genusses vergeht wie ein leichter Lufthauch, aber ein Augenblick des Unglücks bringt ein Jahrhundert von Leiden”云々。想ふに「不幸の瞬間」「苦惱の百年」と云つたのは、微毒に感染したことを指したのではあるまいか。而して彼が微毒に感染したのは、プロッホの説に依るに、千八百十三年伯林にあつた頃であらうと云つた、彼は「愛は吾人の敵なり」Die Liebe ist unser Feind を唱へた。實際上、彼は之を親しく



自身に體驗したのであつた。しかし此の痛ましい體驗は、其の名著「愛の哲學」と「意志及び觀念としての世界」の中に美妙なる文藻となつて描き出されてゐるのである。

### 英國王ヘンリー第八世と徵毒

英國の近世史中、同國宮廷の風儀の甚しく亂れて、腐敗墮落を極めたこと最も著しかつたのは、實にヘンリー第八世の時代である。王は放縱淫蕩を恣にし、在位中六回迄も王后を換へ、しかも其の中二人を死刑に處した。而して王の不倫行爲中、その最も甚だしいのは、カザリン王后を廢してボレインを娶つたことである。ボレインは王が嘗て貴族の妻と姦通して生ませた實子であるから、父子相姦の非行を犯したものである。此の如く背倫淫逸なるヘンリー八世は、千五百四十七年、五十六歳にして崩御し、その病症は下肢の不治潰瘍に併發した水腫病と傳へられてゐるが、併し王は嘗て徵毒に罹つた疑がある。王の時代は徵毒が歐洲に汎く蔓延して猖獗を極め、歐洲各國の帝王、侯伯、僧侶等の中にも之に罹つた者多かつたが、淫蕩なるヘンリー八世もまた之に洩れなかつたやうである。王が同病に罹つた疑ひのあることは、夙にカーリー

(Currie, Edinburgh medical journal, 1888-89) の論じた處で、王が多くの婦人に生ませた子供の大部分は早産死産に終つた。カザリン王後の生んだ王子中、生長したのは第五番目のマリア女王だけで、第一番目は分娩後直ちに死亡し、第四番目は月滿たずして早産した。またアンナ・ボレイン王後の腹よりは、エリサベス王女が成長したゞけで、其の後二回妊娠したが、一回は早産に終り、他の一回は死兒を生んだ。ボレインの後に娶つたセイムア后はエドアード第六世を生んだ後、産褥中に死んだ。その後娶つた三人の王后は、いづれも子が無かつた。此の如くいづれの王后も流産早産死産に終つたこと多く、また子の宿らなかつた事實に徴すれば、王が微毒に罹つた疑の起るのも當然である。また幸ひに生長した王子エドアード及びマリアも、其の頭蓋はいづれも幅廣くして前頭が突出したのみならず、生來虚弱であつたことに徴しても、遺傳微毒の疑がある。併し、クラインウエヒテル (Kleinwächter, Wiener medizinische Presse, 1891) は此説に反して、王の微毒に感染しなかつたことを論じた。そ

の説に依れば、微毒の遺傳は長子より次子、次子より末子と次第に減じて來るものであるのに、ヘンリー八世の王子に於て然らず、現にエリサベス女王の如きは別に王の末子でも無く、早産または流産した同胞の間に挟まれてゐるにも拘はらず、至極健全であつて、遂に王位に上つたでは無いかと云ふのである。しかし史家の論ずるが如く、エリサベスは決して王の實子でなく、ボレイン王后が王の眼を偷んで姦通した情夫との間に出來た子であるとすれば、エリサベスが健全であつたのも當然のことで、クラインウエヒテルの異論も全然取るに足らぬことになる。

## 梅毒患者と看做された哲人ソクラテスと

### アウグスツース大帝

梅毒がコロンブス一行によつて中央アメリカより歐洲に輸入されたと云ふ説は多數の歴史學者に承認され、今日では最早動かすべからざる定説となつた。然しなほ之に反對して梅毒の舊大陸に於ける古代存在説を主唱する者も往々ある。近年獨逸の Stuttgart 市より出でたフォールベルグの「梅毒起源論」Vorberg. Ueber den Ursprung der Syphilis もその一である。之に對して土肥慶藏博士は「梅毒の起源に就てフォールベルグ氏の説を駁す」と題せる一文を昨年一月發行の「東京醫事新誌」第二四〇三號に公にし、フォールベルグの考證の全然誤謬にして取るに足らざることを詳論されたが、その中、茲に抄出したいのは、哲人ソクラテース及びアウグスツース大帝を以て遺傳梅毒患者なりと考證し、梅毒の夙に歐洲太古時代より存在せる證明としたフ

オールベルグの所説と之に對する土肥博士の論駁である。

哲人ソクラテースが鼻の低い醜貌の人であつたことは周知の事實であつて、巴里のルーブル宮にある哲人の壯年時代の胸像も、羅馬のワチカン宮にある老齡時代の胸像も、鞍鼻であるフォールベルグの著書中には之に就てソクラテースがクリトプロスと美醜を争つた閑話を掲げてある。

クリトプロス「それはそれで可いとして、今度は鼻だ。一體君の鼻と俺の鼻と、どちらが格好が好いと思ふ。」

ソクラテース「フン、鼻と云ふものは嗅ぐために作られたとしたら、俺の鼻の方が矢張り好い君の鼻の孔は下向いてゐるが、俺のは空向きだから、その方面からくる匂でも俺は皆嗅ぎ得られる。」

クリトプロス「だが、君のつぶれッ鼻が俺の低い鼻よりも立派だとは、どう云ふことかい。」

ソクラテス「それはな、俺のやうな鼻だと眼障りにならないから、兩眼の視たいと思ふものは何でも見えるわい。そこになると、高い鼻は兩眼にとつて嫉妬の障壁ぢや。」

フオールベルグは上記の如き閑話を挿入し、ソクラテスの鞍鼻を以て遺傳微毒に因るものであると斷定した。彼の鼻の低かつたのは事實である。鞍鼻が遺傳微毒の一徵候たることも事實である。しかし必ずしも遺傳微毒のみに限られた徵候でもあるまい。誰かソクラテスは小兒の時に外傷を受けたことが無いと保證する？

著者は更に羅馬のアウグス투스大帝も遺傳微毒に罹つてゐたらうと云ふ。それはかうである。帝の父親は頓死し、母の身體には蛇の形をした班紋があつた。これは色素性微毒疹であつたらう。のみならず、大帝の齒は小さくて隙間だらけであつた。その身體に班點と痣疣とが胸から腹にかけて、宛も天空の大熊星のやうな形に擴がつてゐた。また左側の腰關節から下肢一たいが弱くて屢々跛をひいた。それから右の示指

に力が無く、寒い時には痙攣的に強直して筆を執るに不自由であつた。且つ彼は誕生日頃になると、がつかりしてゐたし、寒暑に堪へ難く、春陽の時節には必ず悪夢に襲はれ、春の初にはきつと胸炎を患ひ、南風が吹くと頭がぼうとした。虚弱な身體ゆゑ、帝は頗る養生家で、湯水を使ふ際には特に注意して、先づ火の前で身體をあたゝめ、然る後に強い日光で温まつたる水をかぶることにしてゐる。またその神經を強めるために海水浴や硫黄浴を取る時は木製の浴槽の中で手と足を交互に動かすだけであつた。

フオールベルグはアウグス투스大帝のかうした既往症から遺傳微毒徵候の一なるハッチンソン氏の齒型や小兒麻痺やを想像した。著者は更にその文の附註に於て、大帝は色素班の他に皮膚瘙癢症にも罹つてゐることを指摘した。しかし著者の醫學、ことに微毒學に關する知識は餘りに幼稚である。大帝の母後の肌にあつた蛇形の班紋は、皮科學者から觀れば母班(あざ)にすぎぬ。また大帝の身體にも大熊星のやうな班

があつたと云ふが、しかし、それは大帝のも母后のも共に母班であることを證據立つるものである。何となれば母班の屢々遺傳することはその名稱でも分る位であるからだ。況んや微毒性色素斑は第二期に於ける比較的稀有の症候であり、それが遺傳微毒にも來るとすれば、生後間もなく現るべく若しその小兒が生存するにしても一二年後には既に消滅すべきであり且つその排列が左右均一たるべく、大熊星のやうな偏つた形はしてゐなからう。尤も是等微毒の徴候は少しく専門の門戸を窺ふたものには知れきつたことである。

しかし、たとへ、さうした専門學的事に入らなくとも、大哲ソクラテスや大帝アウグスツスは歴史あつて以來の偉人英雄である。それが微毒患者の子として生れたとすれば、吾人は性病豫防の宣傳にうき身をやつすよりは寧ろその蔓延のために努力した方が國家のためになるであらう。

## 姦通の讚美者

Ⅱ有島武郎の死Ⅱ

—

肉を卑んで靈を重んじ、童貞と禁慾とを高唱して、人間の本能性に壓迫を加へた中世紀時代の基督教思想の反動として、既に文藝復興期以前から、自由戀愛論が唱導され實行された。その先驅をなしたものは蓋し十一、十二世紀時代の頃に、佛國のプロヴァンス地方から起つた騎士詩人(トルバドール Troubadour)であらう。彼等は戀愛を美化し、愛人を理想化した作詩を謠ひながら諸國を歴遊し、封建諸侯の夫人に謁見して、その戀人となることに多大の工夫と努力とを費した。そして彼等は自分を愛してくれる夫人の膝下に跪いて、臣下のやうに奴僕のやうに仕へた。かくの如くに

して當時の封建諸侯の宮殿には、姦通が尋常茶飯事のやうに平氣で行はれた。

文藝復興期に入つてからは、中世紀時代の煩瑣なる教會制度の桎梏を脱した自由思想の勃興と共に、騎士詩人の奔放な自由戀愛主義を享け、愛は人間の勝手に作つた道德法律の外に超越すると云ふ議論が、公然忌憚なく高唱せられ且つ決行され、良家の子女と通じ人妻を姦通することが、自由戀愛の實現として讚美せられるやうになつた。因襲の道德法律の制裁の下に立つ結婚は戀愛を殺すものである、束縛されない自由の戀愛にして始めて眞の戀愛であると云ふ思想は、私通姦通の實行者を殆ど到る處に踵出せしめ、殊に青春の血潮の漲つた男女は、相率いて爛熟した性的生活に陶醉した。此の如き有様であるから、當時に於ては私生兒を愛の結晶などと稱へて之を生むのを誇りとし、却つて嫡出兒を賤しむやうな風さへ行はれた。

近世時代に入つてからは、政治に、産業に、社會に、自由解放思想が大に行はれるに至つたが如く、性の解放も高唱されて、貞操を呪咀し結婚生活を否定する思想

が、所謂覺醒した新人によつて宣傳され實行されつゝあることは、文藝復興時代に於けるそれに比してあまりに遜色が無い。そして十八世紀の末葉から前世紀の初葉に亘つて、非常に流行したロマンチック思想の感化を受けたことも、性解放の思想及び決行の發達を助成した一要素である。

二

さりながら性の解放に立脚した自由戀愛説及びその實行の爛熟が、世道人心に著大なる悪影響を及ぼして、社會を頹廢氣分に導き、性生活の大破綻を伴ふに至ることは、從來歐洲に於ける事實が具體的に之を證明してゐる。佛國に於ては十六世紀頃には、姦通を認可して之を社會制度の一と見るやうなことさへあつた。しかしその結果は果してどうであつたか。風紀の頹廢人心の墮落は、遂に恐るべき反動を招かざるを得なかつた。

私共は必ずしも因襲の道德を謳歌するもので無い。その中には時代の趨勢と要求とに逆行するが如き保守頑冥の分子のあることをも能く知悉してゐる。さりながら今日の道德は、恰も人間が猿と共同の祖先から進化し、文明人が野蠻人から進化し來つた如く、また原始時代から漸次進化發達したもので、社會の生存に不適當な部分は自然に淘汰せられ、適當なる部分のみが次第に發達したものであるから、現時に於ける兩性間の道德も、文化的生活をなせる人間社會の秩序を維持する上に於て、適當なるものと認めなければならぬ。然るに今日の新らしがりの男女は、此の如くに近代の文化生活に適應すべく進化し來つた道德慣習を根柢から破壊し、自由不羈なる解放的生活を試みんとし、自由戀愛を唱へて私通姦通を眞正の愛と看做するのであるから、その思想は明かに兩性の關係の無拘束無節制であつた野蠻時代の状態を再現せんとするものである。だから私等は所謂新らしい男女を以て、却つて舊い人間と云ふのである。

人間が社會的生活をなす以上は、自我の満足を充分に得られやう筈がない。必ずや

いろ／＼の形式に於て拘束掣肘を受けなければならぬ。男女關係に於ても、結婚及び之に對する社會的義務、並びに一夫一婦の制裁等は、社會的生存と秩序とを維持する必要から起つたもので、文化生活の仲間入りをした男女は、必ずや社會的道德慣習の拘束の下に生を送らねばならぬやうになつてゐる。いかに巧妙なる詭辯を以てしても姦通が非社會的の不道德であることは到底蔽ふべくもない。何となれば、家庭は社會の單位であるから、家庭を破壊する姦通を許しては、社會的生存とその秩序とを維持することが出来ないからである。

### 三

抑々夫婦關係は家族を構成する根本的要素であり、家族は社會道德の基礎である。されば自己一人許りで無く、廣く社會に關係あることを考へ、個人々々の愛とか利害とか云ふ一方のみに偏せず、家庭及び社會に及ぼす影響を深く念頭に銘記しなければ

ばならない。社會道德を顧みずして戀愛至上主義を唱へ、自由戀愛を實行するが如きものは、個人的利己主義の甚だしきものである。されば夫婦間の愛情がよしや薄らいでも、家庭なり社會なりの關係を考へ、餘程慎重なる態度を取つて自ら處理しなければならぬ。妄りに道德倫常を破つて他に愛人情婦を作り、夫婦關係を破壊するのも、社會に甚だしき悪影響を及ぼす行爲であるから、たとひ夫婦間の愛情の薄らいだ者でも、理性を以て能く統制調節し、徒らに感情に委せて、夫婦關係を破綻するやうな輕舉妄動を慎まねばならぬ。

元來戀愛なるものは感情である。しかも甚だ動搖し易い感情である。だから戀愛は理性の指導統御の下に立たなければ頗る危険である。自己一人が愛慾を享樂せんがために、他人の利害名譽をも顧みず行動するが如きは、全然道德に合致しない利己主義であつて、實に自己を滅ぼすのみならず、社會に甚だしい害毒を及ぼすべき非理不法の行動と謂はざるを得ない。自己の愛を充足するがためには、世間に如何なる非難が

あつても、いかに道德の埒外に出ても飽迄その目的を達しようとするが如き戀愛一點張りの人間は、全く自由解放の精神を履き違へたものである。蓋し自由解放は個人として自由とその人格の進展完成を遂げしめるがために必要であるので、道德倫常を無視した姦通の如きは自ら人格の尊嚴を破壊せる行動であり、動物的生活に墮落したものと謂はざるを得ない。戀愛の自由と神聖とを認める場合は、その行動が道德上一點の非難も無い純潔崇高のものでなければならぬ。道德を無視して戀愛の自由神聖を唱へるが如きは餘りに無法僭越なる見解である。

四

曩に文士有島武郎氏が人妻と通じ、共に情死しに時、世間の中にはその姦通を讚美し、その情死を謳歌した者が多かつた。有島氏がいかに文壇に名ある人であつたにもせよ、苟しくも有夫の婦人と姦通した以上は、法律道德の罪惡を犯した人間として飽



迄も糺彈するのが至當である。たとひ大文學者にもせよ、大思想家にもせよ、人の女房と姦通情死しても敢て差支へはないと云ふ理由はない。それとも文士や藝術家に限つて姦通御免の自由権が與へられてゐるなら兎も角、今日の道德法律に於て、四民おしなべて姦通の罪惡なることが明かに認識されてゐる以上、有島氏の姦通を讚美し、或は默認するのは實に不埒千萬、言語道斷の次第である。併し彼等も有島氏のやうに矢張り美しい人妻と戀に落ちて、人眼を忍ぶ不義の歡樂に酔つて見たいと云ふ陋劣な根性や好奇心の所有主である處から、所謂同病相憐むの格で、故意に姦通情死を謳歌讚美するのも知れない。その痴その愚、實に憐笑に餘りあるも、しかも之がために一國の風教に惡影響を及ぼすことを考へては決して之を放任してはならない。社會風教の取締を口やかましく言ふ官憲は、何故姦通情死讚美説に對して嚴重なる處分を施さないか。殊に某新聞が自社から發賣した有島氏の戀愛論を大いに賣らんがために、同氏の人格を非常に褒め上げ、其の生前唱導した純潔愛のために情死したもののやう

に書き立て、さらぬだに浮華輕佻なる青年男女を誘惑し、射利の目的を達するに腐心しつゝあるが如きに至つては、社會の木鐸が聞いて呆れる。

有島氏の友人がいかに練り上げた修辭的美文でその最期を飾つても、相當に世間の名の知られた身が姦通の發覺の爲め、遂に死を決しなければならぬやうな運命に陥つたことは争ふべくもなく、言はゞ切つ羽つまつた窮餘の最後の手段で、世に有り觸れた心中沙汰と別に異つた處は無い。然るに私共の驚かざるを得ないのは、有島氏が死に臨んで、もなほ自己の姦通行爲の罪惡なることを認識してゐないことである。現に姦婦の夫の波多野春房氏に宛てた遺書の中に、「誰が善いのも悪いのでも無い。善につれ惡につれ、それは運命が負ふべきもののやうです。私達は運命に素直であつた許りです」と云ふ一節があるが、之を見ても有島と云ふ男がいかに倫常を無視し、自己の戀愛沙汰のためには、他人の家庭や名譽を犠牲としても、何等悔いざる人物なることが分る。苟しくも多少の教育を受け、社會連帶の思想を解した者ならば、姦婦の夫に對しては

特にその罪惡の寬恕を哀請せねばならぬ筈で、幾分なりとも罪亡ぼしになる次第であるのに、有島は一言も惡かつたどあやまつて居ない許りで無く、「善につれ惡につれ、運命が負ふべきものです。私達は運命に素直であつた許りです」など、けしからぬ詭辯巧辭を弄してゐる。これが苟しくも文壇の流行兒であり、唯一の人格者と稱せられてゐた人物の遺書であるかと思ふと、實に愛想が付きざるを得ない。「烏の將に死なんとするやその聲や悲し。人の將に死なんとするやその言や善し」とは古聖の語であるが、有島氏は最後に臨んでも姦婦の夫には勿論、他の人達に對しても自己の罪惡を陳謝しないのみか、却つて死は愛の極致とか、死の歡喜などい、減らず口をたいて居るのを見ると、同氏自身も姦通讚美者の一人で、之を實行したものだと思つてよからう。實に驚き入つた「文壇唯一の人格者」である。

## 五

江戸時代に於て、紀海音や近松巢林等の麗筆に上つた幾多の情死劇には、好色放蕩のためとは云へ、其の最後の運命に對しては一掬同情の涙を注ぐべき者が無いではない。そして是等情死者の遺書には無量の哀音が漂ひ、親、同胞、夫妻等に對する謝罪の誠意や悔恨の悲情が歷々と映出してゐる。「人の死なんとするや、その言や善し」といつた古聖の言は實に人を欺かない。然るに有島武郎及びその姦婦秋子の遺書はどうであるか。毫も自己の非を認識しないが如く一言も姦通の罪惡に及んで居らない。これが所謂愛は道德を超絶すと云ふ信條の上に立つた新しがりの人間の本色かも知れぬが、人間としての常識なく、倫常を無視したこと、の如く甚だしい者をば、いかに販賣政策のためとは云ひながら、曲筆舞文してその最期を讚美し、人格を賞讃するが如き記者文士のあるのは、實に昭代の大恨事と謂はなければならぬ。昔者、近松等の心中淨瑠瑠が流行し、あまりに情死を美化するや、これがために悪い暗示を受けて無分別にも心中するものが踵出し、社會人心を益々頹廢せしめた結果、遂に幕府は心中狂言

を嚴禁し、また心中の仕損じ者を嚴刑に處するの已むなきに至つた。有島及び秋子二人の姦通情死に對する無思慮の讚美は、さらぬだに浮華淫蕩なる今日の青春男女を唆つて、幾多の模倣者を輩出せしめるに至るであらう。あゝその俑を作るものは誰ぞ。私共は社會人心のために長大息せざるを得ない。

## 六

有島氏は彼等の讚美せしが如くに、温厚謹直な人格者であつたであらうが、併し意志の薄弱な人であつたことはどうしても争はれない。有島氏自身も「溺れ易い、感じ易い私の心と云ふよりも、今までの行爲を笑はないで下さい。私はこの弱點を憐み愛せずに居られません。私は生涯かゝる弱點に苦しむぬく男でせう」と言明してゐるほど、溺れ易い感じ易い心の持主で、意志の極めて薄弱な人であつた事が明かである。同氏が共產主義にかぶれて、親譲りの資産を放棄すべく決心したと云ふ事實は、同氏

の意志の強固を自證すると云ふよりも、寧ろ前記の「溺れ易い、感じ易い心」から起つたことと見る方が妥當であらう。同氏の如き富裕の家に成長して、物質的の苦勞を味つた經驗も無く、浮世の荒浪にももまれたこともないお坊ちやん同様の人、しかも物に感じ易く溺れ易い人が、共產主義に示唆せられて、俄かにプロレタリアにならうと發心したのも、要するに、ロマンチック的の氣紛れ沙汰に過ぎなからうと思ふ。眞に意志が堅固であり、且つ處世難を充分に味つた苦勞人であるなら、財産を悉皆投げ出して、俄かに貧乏生活に移らうとするやうな突飛な心になれるものでない。

物に感じ易い溺れ易い意志薄弱な有島氏が、獨身生活を送つたことは、同氏を悲惨の最期に終らしめた主要の原因である。同氏は曩に夫人を失つた時、三人の愛兒のため斷じて後妻を貰はぬと公言し、一生獨身生活を送ることを言明した。併しまた五十歳に手の届かぬ氏が、内心性的生活の寂寞を感じたことは争はれない。と云つて世間に公言した手前、今更再婚も出来ない。殊に聖人君子のやうに多數の讀者から買ひ被

られてゐる氏のことだもの、無理にも生理的不満を耐へ忍ばなければならぬ境地にある。併しいかに温厚謹直なる人士でも、本能の必然的要求に打克つことは至難である。そこへ持つて来て波多野秋子といふ凄惨な妖婦が同氏に接近して来た。最初のうちこそ同氏も意馬心猿の狂ふのを抑へて、秋子の誘惑を排したであらうが、何しろ感じ易い溺れ易い心の持主であるから、遂には彼女に征服されてしまつて、不義の戀に陥つたのは蓋し必然の徑路である。

私は有島氏の著作を餘り讀んだことは無いが、同氏が理智の人で無くして、ロマンチックな感情的な人であつたことは、その二三の論文を見ても容易に推想し得られる。若し氏にして理智の人であり、意志の堅實なる人であるならば、秋子のやうなヒステリックな淫婦的な女性に誘惑される筈は無い。況んや彼女は有夫の婦人である。相手を選ぶに事を缺いで、夫のある彼女に引きさられたのは、如何に同氏が理性の人で無く意志の弱い人であるかを自證するものである。

## 七

凡て情死者は正直で、小膽で、意志の弱いことがその通性である。情に強くして理に弱く、暗示感性が鋭敏で、しかも享樂氣分に富んでゐることもまたその通性である。有島氏の如きは、實に情死者共通の心理状態を有つてゐた人と云つても決して差支へはないのである。

物に感じ易く溺れ易い弱點を有つてゐた有島氏は、妖艶な秋子の誘惑に抗し得ずして、熱い戀仲となつた。しかし二人の戀は、現代の社會道德及び法律の許さない不合理の戀である。正直で、小膽なる同氏が、此の不合理な戀の發覺した時、いかに心を痛めて煩悶したことであらう。歡樂極つて無限の哀愁を感じた氏は、社會から受くべき非難攻撃を非常に苦に病んで、遂に死を選ぶに至つたに違ひない。

人間は生に對する執着心の極めて深いものであるが、しかし生存しても、生の價値

の認められなくなつた場合には、死を選ぶやうになる。人間が生に執着する間は、なほ生存すべき餘地あるからで、若しそれが無くなつてしまへば、生きてゐるよりも寧ろ死ぬ方が優しであると云ふ心理は、偉人も凡人も學者も匹夫も共に異つた處はない。さりながら此の如き死の覺悟は、全然生に對する前途の希望の消失した場合に許さるべきことで、例へば不治の重病に罹り、名醫の薬石手術もその効なく、徒らに病床に呻吟して、家族に心配厄介をかけ、社會に對して何等の貢獻だになすこと能はざるが如き不幸の病者が、いつ迄も希望のなき生を食らんより、一日も速かに世を去らんことを望むやうになるのは蓋し當然のことで、深痛なる同情を寄すべき次第であるが、併し身心共に健全なる者でありながら、經濟的に或ひは道德的に行き詰つたからと云つて直ちに自殺するが如きは、薄志弱行の輩と稱せざるを得ない。人間の健全なる限りは、飽くまで生きて闘はなければならない。死は決して萬事を解決するものでもない。よしや事業に失敗し、負債に苦しみ、或は名譽が傷つけられ、地位を失つても

飽くまでも克く之に耐へ、社會的に再生すべく奮闘勇進するのが、人間として最も意義あり、價值ある行動であらねばならぬ。然るに、意志の弱い正直小膽な人間には到底それが出来ない。生き長らへてゐるより、寧ろ死するに若かずとして自殺するのである。

有島氏にして意志が堅實であり、活動的精力主義なる人であつたならば、よしや姦通事件が發覺して、一時は社會から葬られても、克く隱忍自重して自己の藝術に生き、過去よりも更に大なる創作を發表して文壇に貢獻し、以て以前の罪過を償ふべきである。斯くして始めて藝術の士であり、人格者であると稱することが出来る。然るに何ぞや、同氏は自己の藝術的生命の貴重なるに思ひを致さず、淫婦に引きずられて、前途有爲の生を絶つてしまつた。此の如き附甲斐無い人物を以て、果して本當に藝術の士、高潔なる人格者と稱することが出来ようか。

有島氏の死は一部の文士輩の評したが如き、愛に殉じた歡喜の死でも無く、因襲の道德を超越した純愛の死でもない。若し相手の女が有夫の婦人でなかつたら、また現代の法律及び道德が姦通を容認するならば、同氏は秋子と同棲して、いつ迄も戀を享樂することが出来たに違ひない。然るに、その情死するの已むなきに至つたのは、歡樂極つて哀愁の生じたがためである。法律と道德との制裁、社會の非難、自己の地位の動搖等に恐怖戰慄し、その苦痛煩悶を免れるがために、死を選ぶの餘儀なきに至つた結果であると云ふ方が、情死者としての有島氏の心理状態を穿つたものであらう。

人間が死を決するに至る迄には、種々の心的葛藤もあり、苦痛煩悶もあるが、一たび死を決して生存を否定した曉は、一時に重い荷の取れたやうな感じがして、氣樂さを感じるものである。囚人が死刑の宣告を受ける迄は、日夜堪へ難い恐怖と苦惱とに

襲はれて、心の安まる暇もないが、一たび法廷に引出されて死の宣告を聞いた時は、今迄の煩悶苦痛も拭ふが如く取り去られ、始めて安心して寢られるやうになると云ふ。情死者の心理に於ても殆ど之と同様である。死を決した時には最早や苦痛は無<sup>い</sup>。况<sup>ん</sup>や愛人と相抱いて死を共にするの<sup>だ</sup>もの、そ<sup>こ</sup>に寂<sup>しい</sup>一種の歡喜と快感とがある筈である。

さりながら有島氏が「愛より死の歡喜へ」と云つたのは、果して本當に心の底から出た言が、或ひはその最期を飾る修辭かは判らないにしても、愛の極致が死でないことは、苟しくも一片の常識ある者ならば何人も認める處で、相愛の仲ならば、永く戀に生くべくその生命の長からんことを要求するのが當然である。「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひける哉」と云ふのが本當の人情である。有島氏が「私達は最も自由に歡喜して死を迎へるのです」といひ、「私達は愛の絶頂に於ける死を迎へる。他の強迫に因るのではない」と云つたは、一種の詭辯に過ぎない。生きて姦通の

非難を受け、社會から葬られて多人の恥辱を忍ぶよりも、寧ろ死する方が結句氏にとつて如何に氣樂であつたかも知れない。それに秋子といふ妖艶の道連れがあるのだから、死ぬるのは案外に樂であつたらう。有島氏は「他の強迫に因るのではない」と云つてゐるが、現代の法律及び道德の許さない戀の發覺のために、死なねばならぬ切羽詰つた境遇に陥つたことは、同氏の性格に徴しても蓋し疑ひなき處で、小○膽○正○直○意○志○薄弱なる同氏が死を選んだのは、當然の歸結でなくてはならない。

斯く觀察し來れば、有島氏の死は、世間に有りふれた心中沙汰と何等異なる處がない。近松の情死文學が心中した男女を詩化し美化したのは藝術上已むを得ないにしても、その實際に於ては、いづれも道德的に或は經濟的に行き詰つた蕩兒賣女の當に落ちゆくべき末路である。多少同情すべき點はあつても、讚美に値するやうな點は露微塵も無い。有島氏の死も矢張りこれと同様である。同氏の死を藝術化して描寫することは文士の自由であるにしても、現實の社會に於ては、斷じて姦通情死を容認すべき

ではない。况んや意志薄弱なる、溺れ易い、物に動かされ易い有島氏の如き人物を讚美するが如きに至つては、よしや同氏の他の一面に於て長所美點のあるにしても、私共の絶對的に與する能はざる處である。

### 性慾倒錯者としてのルッソー

ジャン・ジャック・ルッソーと云へば、人の知るが如く、佛國革命の導火となつた民約論の著者として有名な思想家である。しかし、此の人が一種狂的の人物であつたことは、その自傳たる「懺悔録」(千七百六十五年發行)に徴して明かなる所であるが、私が特に興味を感ずるのは彼が少年時代に於て性慾倒錯の徴候を現はしてゐたことである。

彼の著「懺悔録」の中、年齢八歳の頃、牧師ラムベルシエーの家になつた條に、

ラムベルシエーの娘は余を愛すること慈母の如くであつた。しかし、また母の子に於けるが如くに、余に嚴罰を加へたこともあつた。初め答の語を以て余を威嚇した時には大いに恐怖の念を抱いたが、一旦鞭答せられた彼は、その痛苦の豫想の如くに甚だしからざることを感じた。そして、この鞭答は余をして牧師の娘を恨む

の心を生せしめなかつたのみならず、却つて余をして之を愛慕する情を起さしめた。余は此の刑罰を受けることを好むがため、故意に悪戯をなした。それは鞭答によつて受ける痛苦と慚愧とが、必ず一種の快感を誘起するからであつて、この快感を得んとするの願望は、彼の痛苦と慚愧とを受ける嫌ひよりも大であつた。

當時八歳の兒童であつた余に與へた三十歳の處女の鞭答は、永く余のために特異なる性質を定めた。余の性質は實にこの呵責によつて奇異なる方向に發達した。余の性慾は途に迷ひ、嘗て受けた鞭答の快の外にはまた他の快を求めなかつた。余は久しく此の慾のために苦しめられ、窈窕たる美人を見る毎に、余の心裡には、ラムベルシエーの娘の姿を想像し之をして断えず余を鞭答せしめた。

以上の記事に徴すれば、ルッソーは慥かに「マソヒスムス」に罹つてゐたのである。これは異性から殴打せられ、凌辱せられて快感をおぼえる一種の性慾倒錯の謂で、その中、特に殴打によつて快感を發する人間を「フラゲルラント」Flagellant といふ。



ルッソーは實に此の種の人物であつた。

彼の前記の如く「マソヒスムス」のみで無くまた他の性慾異常をも示した。それは同じく「懺悔録」中、彼がトリユランのポー街の宿屋に居つた條下の記事を見て明かである。

余の性慾は愈々熾烈となつたが、之を遂行する機會がなかつたので、ある奇異なる方法を以て益々之を刺戟した。余は暗黒なる並木或は僻地を選んで遙かに行路の婦人を望み、心中斯くの如くして彼女の傍に在らばやと思ふ一種猥褻なる態度を示した。が、婦人の見る所は余の猥褻なる態度に非ずして、寧ろ滑稽なる態度であつた。しかし、婦人をして之を目撃せしめた余の馬鹿らしい快感は、實に譬へるに物も無かつた程であつた。若し余に膽力があつて、猥褻な行爲を婦人の通路に演ずることが出来たならば、或は大膽なる婦人があつて、余の慾情を遂げしめたかも知れなかつた。

一日、余は庭後の暗い處に佇立してゐた。そこには井戸があつて、其の家の下女が水を汲むべく屢々此處に来ることを知つてゐた。で、此處より戸を排して進むと、迂回せる歩廊を経て寤裏に達することが出来る余はこの歩廊の暗くして且つ長いのを見て、之に通じ隠れたならば發覺せられる憂ひなしと思ひ心これを持みにして下女の井戸に近き來る時を窺ひ、彼の猥褻といはんよりも寧ろ滑稽なる喜劇を演じた。下女の中でも伶俐なものは見て見ぬ振りをしたが、稍痴鈍な者は之を笑ひ、一層馬鹿なるものは侮辱を受けたと思ひ、大聲を出して余を罵つた。余は身を抽んで廊裡に躍入し、暗所に向つて遁じ隠れた。追跡者の中には男の聲もあつて、余に戒心を促した云々。

上記の一節は婉曲の筆を以て記してあるが、私共から見ると、その「エキスピビチオニスムス」 Exhibitionismus なることが直ちに看破せられる。それは公衆、就中婦女子の前に恥部を暴露して快感をおぼえる異常性慾であつて、ルッソーが前記の一節

中に、「猥褻なるよりは寧ろ滑稽なる喜劇」といつたのは即ちこの事である。這般の變態性慾は種々の精神病者、ことに精神薄弱、神經衰弱症、老耗症、重症の遺傳を有する發作性衝動症、及び癲癇等の病者に來ることもあるが、また變質者に於ても之を認めることがある。そこは婦人を驚かし、或は羞恥を感せしめることによつて快をおぼえる「ザヂスムス」に基づくものもあれば、また異性から嘲罵せられることによつて快感を發する「マンヒスムス」に因ることもある。ルツソーの「エキスピチオニスムス」の如きは後者に屬するものである。

あ、民約論の著者として歐洲各國に自由思想を傳播し、佛國の革命を誘發せしめたルツソーは、實に上記の如き性慾倒錯者であつたのである。

ルツソーの性慾倒錯は彼の精神病的體質、即ち變質の一徵候に外ならない。彼の變質者たることは、その自傳なり挿話なりに徴して毫も疑ふの餘地はない。彼は生來感情激烈にして、且つ變動し易く、意志もまた薄弱で固定した處がなく、或は時計商と

なり、或は魔術師の眞似をなし、或は人の僕となるかと思へば、一轉して公使館の書記となり、また文學を研究するかと思へば、教育、宗教、哲學にかはるなど、その行動の變轉すること端倪し易しからざるものがある。加之、偷盜症狀を有し、或物品を見れば之を慾望するの念勃興して抑制に苦んだことさへある。彼は當時の佛人に容れられず、その著書も國會の焼く所となり、輾轉不遇の逆境に沈淪した結果、精神益々沈鬱となつて追跡妄想を抱くやうになり、帝王も民衆も自分の著書を讀んで己を敵視してゐるとの感を有つてゐた。佛國を脱して英都倫敦に赴くや、佛國の外相が自分の跡を追うて捕縛に來ると妄想し、旅館に財囊荷物を置き棄てにして海岸に向つて逃げ走つたこともある。その後再び故國に歸つたが、追跡妄想愈々深くなつて幻覺を來し、敵の間諜の自分を罵る聲を聞き、また新聞を讀むと、敵は自分が陰謀を企てるやうに思つてゐるなどと妄想した。嘗て田舎に住んでゐた時、一兒童に遭つた所、之に接近した刹那、兒童の容貌が忽ち一變して猛惡の相と化し、敵の間諜のやうに見

えた。かくの如く彼は四面楚歌の思ひをなし追跡妄想に悩まされ、遂に千七百七十八年自殺して塵世を去つたのである。

彼は疑ひもなき變質者で、遂に發狂した。その性慾の倒錯は要するに病的徴候の一に過ぎないのである。

### 「マソヒスムス」と結婚

異性より虐待凌辱せらるゝことに至大の快樂を感じ、性的満足を感じる處の性慾倒錯・即ち「マソヒスムス」Masochismusのものが正當の結婚をなすことの不可能なる所以は固より自明の理である。何となれば、此種の變態人物の憧憬愛慕するものは、異性を虐待凌辱することを何よりの快樂とする反對の性慾倒錯「サヂスムス」Sadismusのものであるからで、若し、夫婦の一方が「マソヒスト」であり、他の一方が「サヂスト」であつたならば、性的に調和することが出来るにしても、併し此の如き家庭の如何に不幸であり、いかに悲惨なるかは固より絮説する迄もない。「マソヒスト」に對してその倒錯せる性慾を最も強く刺戟し且つ満足せしむるものは、異性の不貞であらねばならぬ。單に自己の身體の鞭笞毆打せられ、及物で刺切せられて肉體的苦痛を味ふことも大なる快感に相違ないが、併し尙これよりも歩を進めて、相手の異性の全然

自己に裏切つて他人と姦通し巫山戯ちらす状態の眼の前に瞥見したり或は之を想像したりすることは、異性より受くる處の屈辱侮蔑の中でも最も熾烈なるものであるから「マソヒスト」の中には、故意にその妻に對して姦通をなすべきことを勧め、心の中では、絶大の屈辱を感じながらも、而も之によつて、一面に無上の快樂を覺ゆるが如き者も稀でない。さればその結果が家庭を根本的に破壊し取りかへしのつかぬ不幸不祥を招くことは固より明白なる處である。「マソヒスムス」なる學名の淵源となつた奥國の文士マソツホは、實にその好例であつて、彼は、その變態性慾に極度の満足を與へんがために、その妻のラウラより受くる處の肉體的苦痛のみにては喰ひ足らず、遂に自ら發議して妻を姦通せしめた結果、彼女は可い氣になつて、散々醜態を演じ財産を浪費し、果てはローゼンタールと云へる新聞記者と手に手を取つて巴里に驅落し、マソツホを非常な憂き目に遭はせたことがある。此の如くに妻をば恣まゝに姦通せしめることによつて大に快樂を感ずるやうな「マソヒスト」は最も甚しい性慾倒錯の致

す處であるが、併しモルも説いた如く、マソヒストの中には、異性の不貞を最高度の屈辱と感ずるので、それに主なる快樂を求めらるやうな極端な者も現はれるのである。

Es kann so weit gehen dass er seine Hauptwollust in der Untreue des anderen Teils findet, weil ihm dies als der höchste Grad der eigenen Demütigung erscheint” 正常の男女に於ても両者が同時に性慾を満足すれば、之によつて性的快感を増進すると同様に、「マソヒスト」は、「ザヂスムス」の異性との交會によつて充分に性慾を満足し、兩者共に快感を増盛することが出来るのであるから、若し夫婦の一方が普通の人間であれば、假令ひ、その一方が他の一方の要求によつてその氣に入るやうに虐待するにしても、「マソヒスムス」のものに取つては、同時に性的満足なり感興なりを共にすることが出来ない故、何となく飽き足らず、果ては滑稽の感さへ生ずることがある。しかしその相手が肉的には快感をおぼえないが異性を虐待することによつて唯だ精神的に愉快を感ずるやうな「ザヂスムス」のものであつても「マソヒスト」に取つては満足で

ある。されば「マソヒスムス」の男子が「ザヂスムス」の女子と結婚を約するに際し、その性的満足の上より考へて、妻が如何なる亂行醜態を恣にしても決して介意せざることを約束し、それによつて自己の倒錯性慾を満足するが如き者も尠くないのである。

さりながら、「マソヒスムス」の中にも、その變態行爲を除けば、性慾のなほ通常なる者もある。即ち此の如き者は單に一定の異性に對してのみ變態的刺戟を要求するので、例へば、自己よりも身分地位の低き異性（賣笑婦、妾婢等の如き）に對しては、「マソヒスト」であつても、自己と同格或は以上の異性には常人として交會するが如き者もあり、或は精神的に性慾倒錯がある許りで、肉體的には常人の如くに性交能力を有つて居るものもある。されば此の如き者は正當の結婚をなすことが出来るにしても、併し健全平和なる家庭をつくることの出来ないのは勿論である。また自己の性慾倒錯の露顯するを恥ぢ相手の異性がその要求に應じないやうな夫婦中では、早晚その

家庭が破壊せらる。モルの記する處に依るに、「マソヒスト」なる某高等官は性交の際、その妻に自己の體部を殴打せしめたい慾望が窘迫しても、妻が之を拒絶するのて、夫婦相談の結果、時々近くの大都市に往いて、其處で倒錯性慾を満足せしめることゝなつたと云ふ。また自己の性慾の異常が妻に露顯するのを恥とする者は矢張り家庭外に愛の對象を求めるやうになるから、これ亦た夫婦間に龜裂を生ずることになる。

しかし、「マソヒスト」といつても、一生を通じて終始異性に虐待を要求する者もあれば、唯だ性交の際に限りて性慾が倒錯し、それを満足した後は如何に甚しく自身を虐待した異性でも、忠實なる愛人として、眞面目に熱愛する者もあり、或は初めのうちは性的満足後、異性に對し要求した變態行動を恥ぢても、時を経るに従つて羞恥感情が次第に減失するものもある。また、その變態的要求の實現せざる間は、相手の異性に甚しく憧憬の念を寄せ、その膝下に跪伏しても、一たびその目的を達した後は、

忽ち愛慾が冷却するが如き者もあり、或はその性慾倒錯の輕蔑なるものは、結婚生活後、正規の性交に習慣することによつて常態となるものもある。此の如く、「マソヒスト」には種々あつて、一樣に律することは出来ないから能くその度合を調査して結婚の適否を決定せねばならぬ。

### 極端なるマソヒスムスの一女性

異性より暴行虐待を受けることによつて性的快樂を感じる變態性慾、即ちマソヒスムス Masochismus の例證に就いては、是迄精神病學者及び法醫學者等の多數の報告があつて、その文獻は枚擧するに遑ない程であるが、茲に私の記述する一例は、數年前東京市に起つた出來事で、その内縁の夫より殘忍極まる暴行を受けることを喜び、これがために遂に慘死した一女性の事件である。極端なるマソヒスムスと認むべき異常の一實例として私共の記憶すべきものであると、また一には我國に起つた珍しい變態性慾事件であるので、私の備忘録中よりその大要を抄出するのである。

今から數年前、東京市下谷區龍泉寺町に住んでゐた大工職小口末吉(二十九歳)の内縁の妻に矢作よね(二十四歳)といふ女があつた。もとは吉原遊廓の河本樓の女中で、末吉が大工といふ職業柄、嘗て同樓の仕事に行つてゐた時、相愛の仲となつたもので

ある。末吉はそのため妻を離縁して、よねと一戸を構へ同棲することゝなつたが、二人の仲は蜜のやうに甘く、よその見る眼も羨ましい程であつた。末吉はいつも朝の六時頃から家を出て仕事に出掛けてゐたが、當時二階に同居してゐた或る若い男が、末吉の留守中によねと關係を結んだ。

處が、或日女は末吉に向つて、

「お前さんが家に居つても、また仕事に出ても、わたしのことを思つてゐては、さぞかし胸が苦しからうね。その苦しみを去るためには、わたしはどんな苦痛な思ひをしても厭はないから、どうかわたしの脊中に小口末吉の妻と焼火箸で焼きつけておくれ。さうすればお前の苦しみも去り氣持よく仕事も出来るであらうから」といつた。末吉はこの突然の言葉に一時は驚いたが、

「女の言ふ通りに焼印をつけて置いたら、これから他に男を拵へないだらう」と心の中であらうなづきながら、女の言ふがまゝに、その脊中に焼火箸で小口末吉の妻と焼きつ

けた。

「どうだ。熱かつたらうな」と訊くと、女はニッコリとして、

「えゝ灸より樂だよ、だがお前さん、脊中では見えないから、腕に焼きつけておくれな」とせがんだ。そこで、男は前同様の方法で、女の右の腕に同じ文字を焼きつけた。

處が女は、今度は逆で見えないから、眞直に焼きつけてくれと頼むので、男は三度左の腕に焼きつけた。

「苦しいだらうな」と流石殘忍性に富んだ末吉も暫しはその焼きつけた腕の糜爛の痕を見つめた。

「なに、灸より樂よ」といつて女はニヤリと笑つた。

女は斯かる慘虐なる苦痛を受けながらも、少しも男を恨まず、却つて愉悅を感じ、

二人の仲は以前にも増して濃密の度を加へるやうになつた。

それより以來、女は性交の後に、男に向つて身體の各部に傷をつけることを熱望す

るやうになり、指や足趾を切せられた。若し男が之を承諾しない場合には、自身で切つて何等の苦痛さへ覺えず、却つて斯かる慘虐なる所業を喜んでゐた。此の如くに指趾を切られ、或は手の爪を剝がれたりなごして暴行の限りをつくされながら、それを何よりの快樂に感じてゐた女は、遂にそのために生命を失つてしまつたのである。然るにこの夫婦に二階を貸してゐた主人は、かゝる殘酷行爲の演せられることを少しも氣づかなかつたと云ふ。そして、女は死に瀕する時までも男に強い愛情をもつて、屢々熱烈なる接吻を與へたさうである。

この戀態性慾に因る傷害致死事件は、東京地方裁判所刑事一部西郷裁判長によつて公判に附せられ、當時都下の評判に上つた。

上記の一例は蓋し性慾倒錯に因る傷害致死事件として、我國に行はれたもの、中最も慘酷を極めたものである。歐洲の文獻を調査して此の如きも例證はあまりに多くない。

### 江戸時代の文獻に見えたる屍愛と快樂殺人

私は目下江戸時代の小説及び隨筆書等に就いて、變態性慾に關する事例を調査蒐集しつゝあるが、茲には兎も角、屍愛 Nekrophilie と殺人淫樂 Lustmord と認むべしものを各一例づゝ擧げて見よう。

屍愛とは、異性或は同性の屍骸に愛着する性慾倒錯であるが、上田秋成の著作「雨月物語」中の「青頭巾」には、一僧侶がその生前鐘愛した美童の死んだ後もその遺骸に戀着して、屍肉を喰つたといふ凄慘なる叙事がある。

こゝに稀有の物がたりの侍る。妖言ながら人にも傳へたまへかし。この里の上に一字の寺の侍る。もとは小山氏の菩提院にて、代々大徳の住み給ふなり。今の阿闍梨は何某殿の猶子にて、ことに篤學修行の聞えめでたく、この國の人は香燭を運びて歸依し奉る。我が莊にも屢々詣で給ひて、いともうらなく仕へしが、去年の春にて



ありける。越の國へ水丁の戒師に迎へられ玉ひて、百日あまり逗留し給ふが、他國より十二三歳なる童兒を具して歸りたまひ、起き臥しの助とせらる。かの童兒が容の秀麗なるを深く愛でさせ給うて、年來の事ども、いつとなく怠り勝ちに見え玉ふ。さるに今年四月の頃、かの童兒假りそめの病に臥しけるが、日を経て重く惱みけるを痛み悲しませ給うて、國府の典藥のおもたゞしきをまで迎へたまへども、その驗もなく、遂に空しくなりぬ。懐の壁を奪はれ、かざしの花を嵐に誘はれし思ひ、泣くに涙なく、叫ぶに聲なく、あまりに嘆かせ給ふまゝに、火に焼き土に葬ることをもせで、顔に顔をもたせ、手に手を取りくみて、日を経給ひしが、遂に心亂れ、生きありし日に違はず戯れつゝも、その肉の腐り爛るゝを惜みて、肉を吸ひ、骨をなめて、食ひつくしぬ。寺中の人々、院主こそ鬼になりたまひつれど、あはたゞしく逃げ去りの後は、夜々里に下りて人をおどし、あるは墓をあばきて、なまぐしき屍を食ふありさま。げに鬼といふものは、昔物語に聞きもしつれど、現にかくなり

玉ふを見て侍れ云々。

快樂殺人はザヂスムスの高度なるもので、異性を殺害した上にも、その血を嘔り、肉や臟腑を食して、性的快樂を感じる殘忍極まる性欲倒錯である。これと覺しき一例が清水濱臣の「遊京漫録」中にある「白髮畑の怪」と題した記事中に掲載されてある。

五里ばかり下りて左に高く聳ゆる山を白髮畑と云ふ。楫どりの物語るを聞くに、この嶺に怪しき者の出で、人を取ることに有りければ、紀の殿より討手の人達、をとつひの日、此所に来りて、とかくあなぐりせらるれども、未だ捕へ得ずと云ふ。そは如何なる怪しき者にかと問ふに、舟人くはしく語りきかすには、きさらぎの末つ方よりのことなりけり。この山の麓の村々の女、ともすれば不意に失することあり、初めのほどは密夫などのありて、心を合せて盗みいたるならんといひて、探し求むれども誰一人探し出でたる者も無かりければ、まよはし神にや誘はれつらんなどいふかりあへる程に、誰言ふとなく、白髮畑の山蔭には怪しき者出で、人

を取り喰ふなりと言ひ騒ぎしかど、たしかに見たりと言ふ者もなく、日頃ふるにこの山の麓に某村とか云ふありて、その村の長の娘、年二十ばかりなるが、田舎に珍らしき姿形なりければ、とかくよばふ人も多かりけり。さるに早く懸想しける男ありけれども、親の許さぬ仲にて、俄かに他の男を聲に取らんとしけるを、女苦しきことに思ひて、ひそか男と謀りて、夕月のたど／＼しき紛れに、あくがれ出でにけり、追ひ来る人あらんを忍びて、山路を経て遁れ行くに、うしろより来るものあり。男にやあらん、女にやあらん、丈低く顔いとしわみて、頭には針を植ゑたるやうな髪を尺ばかり振り亂して、海松のやうに裂けわたるつづれを着たるが、行きすがふまゝに、女をかき抱きて走り往くを、男驚きて追ひかくるに、鳥の驅けるやうにて追ひつき難し。この怪しの者は幾度か顧みて、笑ひ／＼行くに、いつしか行方を見失ひぬ。男くやしき言はん方なく、なほいかで女を取り返さばやと、木の根岩かど越え踏みて、山路深くも分け入るに、月なほ山の端に残りて木の間もる影凄

し。谷川の岸に到りたるに、岸の向ひに女ありたり。うれしき言はん方なく聲を上げて呼ぶに、かしこにも呼ぶ聲す。見れば怪しの者も居らず、渡せる板橋をば、かしこの岸に引上げおきたれば、渡るべき手だても無し、男大聲にその橋はや渡せといへど、女はたゞ手を舉げて、こなたをさし招くのみなり、男心いらだちて、いかで疾く／＼と言ふに、女、物をたよりにて立ち上らんとすれど、足たゞす、これを見て泣くこと限りなし。男いと甲斐なきことを心急ぎて、如何にもしてその橋わたせど叫ぶに、女また頭の上におほへる松の大木を指して泣く。男、眼を定めてよく見れば、松の上に怪しき者上りゐて、下なる女を睨へて居り、見るに恐しとは物かは、身の毛もよだちて、わな／＼かるより外なし。詮方なくまもりゐたるに、怪しき者梢よりすらくと下りて、女のもど／＼りを搔いつかみて仰向けに押し倒しぬ。女や／＼と叫ぶを、たしかに抑へて、劍のやうなる長き爪にて、乳房のあたり下へ二かへばかり撫づるやうにするに、着たるものも、結びたる帯も、すた／＼に裂けて、肌の

あらはるゝを、胸先きに口さし當つるやうに見えしに、女あつと一聲叫びて、のけ  
さまにそるを、動かしもあへず、血を吸ふ。手足をわなゝかして泣き叫ぶ聲いと悲  
し、男も魂きえて我さへ腰立たすうち伏しぬ。やう／＼血を吸ふにつけて、弱りゆ  
く聲かすかになり、果ては腹わたを掻き出で、喰ひつくしぬ。さて亡きがらを倒し  
まに松の枝に引きかけたるを、男一目見るよりまことに絶え入りぬ。

年若き美人を引きさらへて深山に入り、これを殺傷して血を吸ひ、腸を喰つたと云  
ふ上記の事實は、歐洲諸學者の既に記述報告した殺人淫樂者の行爲に對照すれば、顯  
著なる類似を示してゐる。私は上記の記事を以て直ちに殺人淫樂と斷定するのでは無  
いが、しかしその色彩を帯びて居るのが著しいやうに感ぜられる。

### 印度の古典「カマストラ」に於ける變態性慾

印度に於ては、性愛に関する典籍が甚だ多く、シユミットの著「印度のエロチック  
の追補」Schmidt Beiträge Zur indischen Erotik. 3. Auflage. 1922 の中には此種のも  
の數十種を列挙してあるが、その中にも最も有名であり且つ根本的の文書であつて、  
性愛に関する印度の最古典であるのは、實に「カマストラ」Kamasutra である。

本書は紀元一世紀若くは二世紀頃の人「ヴァチャヤナー」Vatsyayanaの著作であつ  
て、獨、英、佛の三國語にも翻譯され、我國に於ても、大正十二年大谷大學内の印度  
學會よりその譯書を刊行した。その内容は總説、性交、少女親近、妻女、他妻親近、  
娼婦、奥義の七篇より成り、性愛に関する諸般の事象を詳細に且つ露骨に叙説せるも  
ので印度民族の性的生活は之によつて明かに窺知することが出来る。その中、性交篇  
の章下に記述せる爪の搔傷、齒の咬傷、打撃等に関する事項は、變態性慾の色彩を帯

び、「ザヂスミス」的行動と認むべきものもあるから、印度民族に於ても、夙に往古時代より這般の行爲の演ぜられたことを證明する資料として之に關する記事を左に抄出する。

「性交は本來争鬪的のものである。性愛の動作は敵對性にして且つ屈曲性であるから。されば熱情の極、異性の體の或部分に打つことは性愛の伴隨である。」

「熱情を有する人は、愛の爪傷を施すがために、左手の指の爪を長く尖せて置く。」

「婦人がその體の隠れ場所に情人の爪傷を見る時長き日の後すらも、ありし日の愛情は、その心中に親しく起るであらう。若し古き契りの情人を想起すべき爪の傷痕が無かつたならば、愛情も長き日の後に消え失せるであらう。」

「爪傷を體のあちらこちらの部分にもつてゐる男子は大抵の場合深き婦人の心をときめかすであらう。」

「爪と齒で爲された動作の過程ほど、愛情を増すものは何物も世に無いであらう。」

「搔傷、咬傷は、時として愛人に贈る品物にも施される。これは愛情の表示のために爲さるゝ豫備動作である。」

「花飾り、接吻及び咬齒の傷は婦人の左頬の飾りである。」

「チヨーラ國王は、チトラセーナと名くる娼婦の胸に打撃を與へたが、この打撃に堪へずして女は死んだと傳へられてゐる。」

「クンタラの人シヤタルナの子シヤータヴァハナは、マラヤヴァイなる皇妃を打撃で殺した。」

「バンドヤ王の將軍ナラデーヴァは傷痕ある手を以て打撃を與へて一人の舞姫を隻眼とした。蓋し頬を打つべきを過つて眼に當つたのである。」

## 女を刺し或は切る男

### 一

途上に遭遇せる未知の婦女を襲うて傷つけ、快感をおぼゆる處のザヂスト、所謂刺孃漢 Mädchenstecher なるものは古今東西を通じて尠く無いが、茲にはその顯著なる實例を二三引證してみよう。

千九百年の八月一日より翌年三月の末に至る迄、ルードウイツヒ港の土堤とムンドハイムとの間に於ける場所及び往來の尠い市街に、何者とも知れず不意にあらはれて、往來の婦女を襲ひ、小刀或はその他の銳器にて下體に重傷を負はせルードウイツヒ港の婦人社會に一大恐怖を感せしめた傷害沙汰が引續いて行はれた。しかも、その犯人は神出鬼没、忽ち現はれ忽ち消え、巧みにその跡を晦らますので、惡魔の所爲で

は無いかと恐れ慄く者も多かつた。傷つけられた妙齡の處女の中には下腹部と大腿とに三ヶ處の刺傷を負ふた者もあつたが、しかし此の如き傷害沙汰はまだ軽い方で、十二歳の娘と十八歳の工女とが眞つ裸にされて慘酷にもメチャ／＼に傷つけられ、剩つさへ肝臓をも切り取られた屍骸がライオン河に浮び上つた時には、その殘忍非道の甚しさに市民を戦慄せしめた。處が或日のこと、兩親につれられて歩いてゐた女兒が暴風のために帽子が飛び去つたので、その跡を追ひ往きしに、兩親は直ぐ家に歸るだらうと思つて、別に顧みずにそのまま歸宅した。然るにいつ迄待つても子供は歸らな。いやがて、その無殘に傷を負ふた屍骸が、偶た川岸のあたりに發見せられた。そこで警官はその邊の場所を搜索した處が、其處に置かれてある鐵管の内にもゐた怪しの男を見つけ出したので、直ちに拘引して鞫問した。なほ、此の男は一人の婦人の殺害せられた場所で沐浴したことのある事實も分つたので、嚴びしく吟味してみたが、その結果は全く證據不充分であつたがため已むなく放免しなければならなかつ

た。  
千九百一年三月の末の夜、人通りの少い街路を歩いてゐた一人の處女が、プロテスタント教會の後に差しかゝつた折、不意に男が現はれ「嫌疑の筋があるから、交番所へ來い」と言つて處女を引き捕へ、交番所らしい場所に連れこんで凌辱したことがあつた。女の告訴によつて、犯人の人相が、當時凶行者と看做されてゐた畜場番人のダミアンといふ男に類似してゐたので、愈々此奴に相違ないと警官は直ちにダミアンを逮捕した。然るに上記の犯行があつてから數日の後、またもや何者とも判からぬ怪しの男が現はれて往來の婦人を傷つけたことが起つたので、炯眼なる警察署長は、眞の犯人を探し出すべく、部下の警官の中から年の若い美男子を選び出して女装せしめ、特に往來のさびしい街衢を散歩せしめた處が、果してこの女装の警官に襲ひかゝつて凶器を閃めかした男が現はれたので、忽ち之を捕縛することが出来た。此の男は名をルードウイツヒ・グラーフといへる工夫で、意外にも世間に評判の善い、職業に熱心

な謙遜な人間であつた。

然るにその身體を検査せしに、婦人の股衣と女靴を有つて居り、また住家内には女の洗濯衣が多數に發見されたので、「ザヂスミス」「マソヒスミス」及び「フエチシスミス」の三種の變態性慾を兼有せる人間であることが判つた。最初のうちは、グラーフはダミアンに罪をぬすりつけてゐたが遂にはその凶行を逐一白狀した。警察の調査に依るに、千九百年の八月より翌年の四月に亘りて十回まで凶行を演じその毒手にかゝつた者は、女工のマリア・シーゲル。アドリーン・ネマテス。カロリーネ・ガイベルゲル。エジア・ゴイベル。ヨハンナ・ビツテル。ヨハンナ・シユミットベルゲル。寡婦のダツケメ。賣り子のソファイ、ヘフレル。勞働者カール・ホルンベルゲルであつて、その傷はいづれも重く、治療に可なり多くの時日を要した。

グラーフは在郷軍人で、軍隊生活の當時は下士に昇進し、素行も善く、刑罰を受けたことも無ければ、狂ひじみた行動も無かつた。但し兵役中、ある若い女と關係して子を産ませたことがあつて、その女といよ／＼結婚しようと思つた時、捕縛せられたのである。彼は公判の際、非常に緊張してゐたが併しその凶行を悔ゆるの色なく、抑制することの出来ない衝動的窘迫から凶行を演じたのであると云ひ、その動機を述べて、嘗て賣笑婦より病氣を受けたがため、あらゆる賣笑婦に復讐すべく凶行に出たのであると唱へた。公判廷に於て、裁判長と彼との間に交換せられた問答の要點を左に掲げてみよう。

裁判長「その方は多くの女を傷つけたに相違ないか。」

グラーフ「それに違ひありません。」

裁判長「如何なる譯で女を傷つけたのか。」

グラーフ「千九百年の或日、私が歸宅する途中、女に呼び留められ、その女から悪

るい病を受けましたので。」

裁判長「それでは何故に多くの女を刺したか。その理由を申立てよ。」

グラーフ「私は病に罹つて後、ルードウィツヒ港の方へ行きました時、途中で二人の若い女に出逢ひました。その女を娼妓と思ひましたので、復讐してやる積りで刺したのです。これは已むに已まれぬ内心の要求であります。」

裁判長「その方は何故女の洗濯衣を家に持ち歸つたか。」

グラーフ「それは私にとつて快樂であるからです。」

裁判長「被告の凶行を掲載せる新聞記事を読んだ時、被告は何と感じたか。」

グラーフ「誠に悪むいことだと思ひ二度とはしないと決心しました。しかし、ある日の夜分、市街の方に行かうとしました時、娼妓らしい女が土堤を徘徊して居りましたので、例の已むに已まれぬ内心の要求が起つてまたもや刺す氣になりました。」

裁判長「女のみを刺すんだな。」

グラーフ「ハイ。若い女を刺すのです。すると私は大に満足を感じます。」

裁判長「被告は、その際酩酊してゐたか、どうか。」

グラーフ「決して酒を飲んだことはありません。」

裁判長「三月の十七日、被告は一人の男子を傷つけたが、それは如何なる譯か。」

グラーフ「あの時は開夜でしたから男であることが判からなかつたからです。」

グラーフに刺された若い女の中、十七歳のSは二箇所、二十歳のMと二十四歳のGは左の大腿を一箇所刺され、十八歳のRは下腹部を一箇所刺された。また二十歳のWは、その情夫と共に散歩してゐた時、背部に一箇所、大腿に三ヶ所の刺創を受けた。二十歳のOのはグラーフの憎悪せる娼妓に似てゐたので傷つけられた。二十三歳のHは可なりの重傷で三週間も病牀に呻吟した。犯人の情婦Mは腹部と大腿とを三ヶ所刺された。

ドクトル・エックハルトは犯人グラーフの精神状態を検査し、性慾には全く異常あり

るも精神病者では無く、唯その快樂とする行爲に抵抗するの力なく、その智能は薄弱なれどもなほ生理的限界内にありと鑑定し、監獄醫のクーンは犯人は生來普通の人間に非すと鑑定した。

グラーフの犯罪行爲は市民に多大の恐怖を感せしめた程、社會的危険性の大なる處から、検事は極刑に處すべきことを要求し、辯護士は醫師の鑑定に基づきて刑の裁量を軽減すべきことを主張した。公判の結果、犯人は九年の禁錮刑に處せられた。千九百〇五年の一月、彼は獄中に病死し、解剖に附せられたが、その所見は世に公にされなかつた。

### 三

アウスブルグ市の刺嬢漢バルトレーは賣酒店の主人で、その外貌は快活であり、且つ恥づかしがりの性質であるが、異性に接するを嫌忌し、唯だ未婚の處女を切りつけ



て之を傷つけるのが何よりも愉快で、之によつて、その性慾を満足した。既に十四歳の頃より美しい妙齡の女を小刀にて切ることの愉快さを想像し、その常に夢に見るものは自分の切りつけた處女の姿であつた。此の空想を始めて實行したのは十九歳の時で、その際、絶大の快感をおぼえたがため、這般の衝動は次第に強烈となり、唯だ妙齡の美人のみを選んで凶行を演じた。その場合には豫じめ處女であるか否かを問ひ、若し處女であると云ふ答を得ると、甚しく愉快を感じて直ちに切りつけた。しかし凶行の後には倦怠違和を感じ且つ良心に責められた。三十一歳になるまで凶行を持續し、いつも切創を與へてゐたが、しかし生命に危険な程度にまでは傷つけなかつた。その後、彼はその凶行手段を改め唯だ處女の腕或は頸を壓迫することのみによりて性慾を満足すべく試みたが、その目的を達しなかつたので、今度は鞘のまゝで刺そうとしましたが、これ亦愉快を感じる事が出来なかつた。そこで遂に鋭利なる白刃を閃して眞に處女を刺せしに、名狀すべからざる快感を感じ、ここにその處女が鮮血に

染み、苦痛を訴ふる状を見ると、愉快極りなく、殆ど前後をおぼえざる程であつた。三十七歳の時に至り遂に凶行の現場を押へられて引致せられた。その家宅を搜索せしに、多數の短刀、仕込杖、小刀の類が発見された。彼は此等の凶器を一見しても、忽ち性的興奮を來たしたと云ふ。彼は處女を傷つけること大約五十人、いづれも良家庭の若い處女であつた。

千八百二十一年の五旬祭の日、ポーツェン市の市民は、トリエントに通ずる街路に於て二人の處女が刺されたこと、その犯人が帝室附の獵兵であると云ふ新聞の記事を見て恐怖の念に襲はれた。その前年にも既にインスブルックにて、多くの處女の刺されたことがあつた。犯人はいつも妙齡の美人のみを傷つけた。その中にも最初に刺されたのは、ステファニーといへる二十歳の美しい處女で、その官憲に告げた處に依れば、犯人は下級の獵兵で、體格の小さい、顔色の暗褐色、鬚鬚の黒い、容貌の犖猛な人間である。或日午後六時過ぎ、彼女が街路を歩いてゐると、彼は近づいてきて「嬢

さん、何處へ行くんですか、御一緒に散歩しようじやありませんか」と呼びかけたが彼女は少しも意に留めずに二三步許り行き過ぎると。彼は突然飛びかゝつて道路の側に立てる棘の牆に向つて彼女を投げつけ、小刀を閃かして三回も下腹部を刺した。彼女は両手を差し伸ばして、抵抗したので幸ひに腹部の刺傷を免れたが、左右の手七本に切創を受けた。犯人は鮮血の流れ出づるのを見て満足を感じたのとまた彼女の大聲を立て、救ひを求めたのとで直ちに遁走した。

同夜七時近き頃、ヤコブ街の近傍にて、ドロテアといへる二十三歳の美人が同じく獵兵のために傷つけられた。その語る處に依れば、彼は不意に彼女の側に近づき來り小刀を取り出して陰部を刺したので、彼女はその場で仰臥けに倒れた。犯人はその前方數歩許りの處に佇みながら、その手にせる小刀より滴り落つる鮮血を暫らく凝視してゐたが、やがて足早にその場を走つて姿を隠した。彼女はそこに通り合せた一農夫に救はれて失血死の危険を免るゝことは出來たが、併しその受けた刺傷は一ツオール

半許りの深さであつた。

これより先き、耶蘇復活祭前の日曜日犯人より傷つけられた給仕女のアーデルハイドは六月二十五日警察に訴へ出た。その言に依ると、彼女が日没前、ドルフバッハの方へ赴く途上に於て、獵兵に襲はれて何等の言葉も掛けられずに突然下腹部を刺され、その創の全治する迄には十二日間を要した。

逮捕された獵兵は初めのうちは犯行を否定したが、遂には隠し切れずに遂一それを自白した。

彼はこれ迄七人の處女を傷つけた。その中三人は千八百二十年の八月三十日及び三十一日、インスブルックに於て、他の一人は晩秋の頃、ロヴエレドに於て刺された。給仕女のアーデルハイドは千八百二十一年の耶蘇復活祭の前日曜日に、ステファニー及びドロテアの兩處女は同年の五旬祭の日に傷つけられた。血に滲んだ犯人の凶器は他の獵兵の背囊中に發見された。凶行の動機が性感の満足にあつたことは固より言

ふ迄もない。

彼は當時、三十一歳であつた。青春時代以來、自瀆に耽り、少女を弄し賣笑婦に戯むれ荒淫を恣にしたが、年を経るに従つて花の如き嬋娟たる處女の下腹部を刺し、その慾情を充たさんとするの念が燃ゆるが如くに起つてきて遂に之を實行するに至つた。そして好んで陰部を刺し、白刃より碧血の流れ滴るさまを見て殆ど堪ゆべからざる愉快を感じた。彼は激怒し易き性質で人に接するを嫌ひ、その慘酷なる行爲に對して毫も悔ゆることなく、また恥づることも無かつた。

### 偶像に戀する男

—

屍姦 Nekrophilie に類似する一種の變態性慾に、彫刻立像を汚瀆するものがある。

即ち偶像汚瀆症或は偶像姦或は偶像愛 Statuenschandung oder Venus statuarie と稱せられるものがこれだ、生活機能なき者を犯す點に於ては屍姦と同様であるが、しかし之にあつては必ずしも性慾の倒錯に因るのでは無く、彫刻の美のために實感の挑發せらるゝに因ることが多いのである。而して此の猥褻行爲を一に「ピグマリオンニスム」Pygmalionismus と稱し、また之を實行する者を「ピグマリオンニスト」Pygmalionist と云ふのは、太古希臘の美術家ピグマリオンが自身で彫刻した美人像に戀着した傳記から起つた名稱である。それ故先づ此の傳説に就いて少し許り述べて見よう。

希臘の太古時代にピグマリオンと云ふ彫刻師があつた。心を凝らし、工夫を重ねて美しい處女の象牙の像を作り上げた。彼は元來女性を嫌つて一生結婚しないうまで堅く決心した程の人間であつたが、自身の作り上げた處女の彫像の美しさに見惚れてからは、遂に之に戀するやうになり、その像が生きてゐるのでは無いかと自ら確めて見る氣にもなつて、幾度もその像の手に自身の手を重ねた。またその前には世の若い女の好きさうな色々の花や眞珠や飾り玉やらを供へ、また美しい衣服を着せたり、寶石を嵌めたりして愛で慈んだが、遂にはその立像を寢椅子の上に横へて自分の妻だと云ふやうになつた。

愛の神ヴェヌスの祭壇のあつた時、彼はその祭壇の前に跪伏して、「私の作つた象牙のやうな女を下さい。」と祈つた。しかし、その本心は「どうぞ私の妻として象牙の處女を下さい。」と祈りたかつたのである。ヴェヌスは彼の心の底を悟つてその願を聞き届けたるしるしとして、祭壇の上に輝ける火焰を三度まで火の玉にして空に跳ね上が

らせた。

ピグマリオンは自宅に歸るや否や、早速例の像を抱き上げてその口に接吻した。すると不思議にもその像の口が一種の温味を帯びてゐるのを感じた。彼はなほ一度その唇を押しあて、像の手足を抱いて見た處が、柔かい感じがして、指で押して見ると蠟のやうに凹んだ。彼は奇異の思ひに打たれながらも驚いたり喜んだりして、幾度も觸れて見た。

うるはしい象牙の處女の像は、ヴェヌスの神秘の力によつて生命を得たのであつた。指で壓して見ると、全く血管の手答へがあつた。彼は女神に心の底から感謝しつつ、精靈の移された處女の像を抱きしめて、再び熱い／＼接吻を試みた。すると處女は花のやうな顔を眞つ赤にして、涼しい清い眼を開きながらちつと彼の顔を見つめた。

斯くしてピグマリオンと處女とは結婚して、その間にパフォスといふ子供が生れた。以上はピグマリオンに關する傳説の大要である。女神ヴェヌスの力によつて自身の

作り上げた處女の象牙の像が精氣を得、これと結婚したと云ふのは固より作り話であるが、併し彼がその彫刻像に戀したと云ふことだけは事實であらう。古今東西を通じて美人の立像に戀する者の往々あることは私共の熟知する處で、所謂偶像汚漬症或は「ビグマリオニスムス」といふが如き名稱の下に記述せられてゐる。

之を往古の物語に徴するに、ルチアヌス・クレメンスがブラキシテレース作のヴェヌス女神像に愛慾の念を抱いて醜行を營み、またクリシフスがサモスの殿堂に於て一女神の立像を汚漬した如き事實があり、また近世に於ては、一園丁がミロのヴェヌス像に愛着して性慾を満足したやうなこともある。

吾が國では「群書類從」に收むる「日本靈異記」の中に、優婆塞が吉祥天女の立像に戀して之を犯したことが記してある。曰く「和泉國泉郡血停山寺、有吉祥天女像、聖武天皇御世、信濃國優婆塞、來位於其山寺、梯此天女像、而生愛慾、繫心戀之、每三六時願云、如天女容好女賜我、優婆塞夢見婚天女像、明日瞻之、彼像

裙腰不淨染汗、行者視之、慚愧言、我願似女、何忝天女專自交之、恥不語他人、弟子偷聞之、後、其弟子於師無禮、故責擯去、所擯出里、訕師程事、里人聞之、往問虛實、竝瞻彼像、淫精染穢、優婆塞不得隱事、具陳語諒委云々」と。

二

クラフト・エビング説に依れば、偶像を汚漬する者は性慾の異常に強い者、或は陰萎の者、或は正常の性交を行はんとする心なく、または之を行ふの機會ない者である。イワン・プロツホも特に性的興奮を惹起し易い者は、美術館に陳列せる美人立像を一見して愛慾を起すことがあるが、此の如き者は年少の教育ない人間が多いと云つてゐる。嘗て佛國のカトリック教の神學者ブーヴィエは、聖母マリアの立像の前に於て自慰的遂情を試みた男子を調査したことがあるが、それ等の男子はいづれも前記の如き人間であつて、別に審美的思想のあるのでは無く、裸體美のために實感が挑發せ

られて猥褻行爲を演じたのであつた。

さりながらまた一面には、生きた美人を偶像の如くに装はしめて、猥褻行爲をなすが如き者もある。それはビグマリオンが自身の作つた處女像に戀着した傳説を眞似、裸體にした美人を立像のやうに臺の上に立たしめ、その前に跪いて祈禱を始めると、その美人は次第に身を動かし初める。その光景が此の種の男子に對して性的快感を喚起せしめるので、カンレルの記述した處に依れば、嘗て巴里の一妓樓に於て、三人の娼婦をヴェヌス、ミネルヴァ、及びヂュノーの三女神の立像に見立て、交會したものがあつたと云ふことである。

明治四十一年の「萬朝報」に、元祿美人の人形に戀着したハイカラ男の記事がある。その切抜を左に轉載しよう。

横濱石川町鶴屋呉服店の店頭へ先月の初旬から飾りつけた元祿美人の人形は、淺草の安本龜八が腕を揮つた近來の名作大評判となり、日々見物の山を築いたゐたが

去る二十五日の午後三時頃、年齢二十五六位の背廣服をつけたハイカラ男が来て、いたく人形の美に打たれたと見え、恍惚として暫くその前を立ち去りかねた風情、其の後毎日のやうに人形の前に来て、戀々の情に堪へざる様子を何時しか店の男共が見つけて、不思議に思つてゐた處、三十日の午前十一時頃、例の如くやつて来て、折柄店員がその附近に見えないを幸ひ、突然店へ入りこんで人形に抱きつき、生けるが如き淡紅色の頬に接吻してゐたのを、一人の番頭が見つけて引きすり下ろし、「人形に惚れて下さるのは有り難いが、疵をつけて下さつては困ります。」とたしなめて、其の場限りに濟んださうな云々。

また大正五年三月の「博多毎日新聞」に、「人形を戀する人」と云ふ題で、左記の如き事實が載せてある。

博多北船町は十三番地に、吉村利三郎と云つて博多隨一の人形師がある。(中略)  
大正二年十一月の頃、市内丸三呉服店の依頼により陳列棚の人形を製作したことが

ある。然るに同店に陳列後は、美しい衣裳を着飾つて愛くるしい子供の手を引いたまゝ、利三郎の店先に陳列してあつた。處がそれから三四日経つて、毎日毎夜同家の店先に立つて、人形を凝視する一人の若者があつた。殆ど二週間あまり通ひ續けるので、利三郎は薄氣味わるく思つてゐると、件の恠しい若者は、さも堪りかねたと云ふ風にツカ／＼と入り來り、是非人形を見せてくれと云ふから、利三郎氏も仕方なしに男の言ふがまゝに見せてやると、その男は、しかも眞つ晝中のお構ひもなく、嬋妍たる人形をひしと許り抱きついて、あやしげな舉動をするので、ドッコイ何千圓もする高價な人形を汚されては一大事と、利三郎氏は人が通るから見つともないと體よく制したので、若者はさも本意なげに手を離し、それならこれから馬鹿な眞似はしない故、人形だけは見せてくれ、その見賃として之をあげると云つて、五十錢玉二枚投げ出して一散に飛び出した。あとで聞けば、此の男は博多金屋小路博多織業白水義太郎と分り、閉口した利三郎氏は漸く尋ねて右の一圓を返却に及ん

だ。思ひきれないのは件の男である。人形だつて眞人間だつて變りは無い。思ひつめた男の一心が腦に上つて變な氣分になり、取どめもない事を口走り、あられもない舉動をするので、家人も持て餘し、一時は座敷牢に入れられたこともある位だつた。利三郎氏はあどの祟りが恐ろしく、昨年暮、人形を八幡町某小間物店に賣りわたした。茲に至つて義太郎の失望云はん方なく、ツイ此頃ボカ／＼温かくなつた春の陽氣に三年間思ひつめた人形の戀がバツと燃え上り、ツイ此の四五日前ボンヤリとして利三郎氏の店を訪れ來り、目下上祇園町にゐるのだが、是非々々あの子供の手を引いた人形を見せてくれと云ふので、利三郎氏は何と云つてよいやら大いに閉口してゐると、義太郎は奥の方へツカ／＼へ這入り行き、方々を探しまわつたが目指す人形が無いのでガツカリ失望し、あめ／＼と泣き出して、是非一目でいゝから人形に逢はしてくれと、切なる戀を打明けた。利三郎も哀れと思つたが、相手は相手故、體よく斷つて追ひ返して了つた云々。

## 戀の病

獨逸語で戀の病をリーベスシュウインドズフト Liebeschwindsucht と云ふ。リーベは愛、シュウインドズフトは「癆」「瘦削」の意であるから、「愛癆」と譯してよからう。片思ひや失戀よりメランコリー、または神経衰弱症を惹起して身體が枯槁憔悴し或は之より更に結核病に感染して瘦削衰弱するのが即ち所謂戀の病である。

「お醫者さんでも有馬の湯でも、戀の病は直りやせぬ」とは昔より言ふことであるが、しかし、それはその原因の失戀或は片戀なることを發見すること能はずして、單に神経衰弱症、メランコリー或は結核病と斷定してしまふからである。若し、慧眼の醫師ならば直ちにその原因を看破することが出來、従つてその療法は結婚を措いて他に無いから、容易に治癒し得られる。たとひ肺結核に罹つてゐても、戀の望みを達して今までの苦惱悲傷が消失したならば、一旦罹患せる結核病も自然に輕快治癒するも

のである。歴史上、戀の病を全治せしめることによつて名高い醫者は、ヒボクラテースとエラジストラトスで、前者はマケドニア王ベルヂツカスの戀の病を一度に治癒し、後者はシリア王子ドン・カルロスがその父王の妾の美貌に戀ひ焦れて病となつたことを看破して兩人を結婚せしめ、拭ふが如く王子の病を全治せしめた。

然るに今日の醫家はその狹隘なる専門領域内に跼蹐して、患者の全體なり、疾病の真相なりを見ることが出來ないやうな者が多い。されば常識を以てすれば容易に判断し得られる普通の病に對しても、之に専門的の病名を下して意外の誤診誤癒に陥ることがある。私は茲に常識に缺乏せる専門醫家が、戀の病を誤診した一實例を擧げて見よう。

某家の一令嬢、平素快活であつた性質にも似ず近頃頓に元氣がなくなつて陰鬱となり、食慾も振はないので、家人は大いに心配し、早速胃腸病専門家として名聲ある某病院長の診察を受けさせた處、胃アトニー、胃液鹽酸缺乏症といふ診斷を下されたの



で、専らその治療に手をつくした處、少しも効驗が見えないので、今度は更に某大學  
内科教授の診を請うた處、意外にも肺結核の初期（肺炎カタル）といふ診断を下され  
た。されば家族の驚き一方ならず、直ちに博士先生の命令通り、輕井澤に轉地して久  
しく療養に努めたが、これまた寸効を認めない。偶々婦人科で有名な某博士が輕井澤  
に來合はせたので、これ幸ひと早速その診察を受けた處、これまた意外にも子宮が  
非常に曲つて居るとの診断で、肺には異常がないから、子宮の位置さへ恢復すれば、  
健康に復すること疑ひなかるべしとの斷定に、家人は始めて愁眉を開き、直ちに博士  
の婦人科病院に入院せしめて、局所手術を受けさせた。然るに二ヶ月の後に至り、院  
長より局所が全く治癒したことを明言されたに拘らず、令嬢の健康は少しも回復しな  
いのみか、時々失神状態に陥り、或は尋常ならざる舉動をなすことがあるので、此度  
は手をかへて某精神病専門家の診断を請うた處、破瓜期の早發痴呆症であると診断せ  
られ、刺戟の多い病院に久しく留め置くのは病氣のために善くないとの忠告を受けた

ので、再び輕井澤に轉じ、種々精神の慰藉に手をつくしたが、これまた依然として効  
驗が無い。よつて斯道の専門家を一々招聘して交る／＼その意見を求めた處、治療法  
としてはいづれも大同小異で更に名案とて無く、中には、豫後の不良なることを斷言し  
た醫家もあつたので、兩親は悲嘆の涙にくれてゐたが、こゝに圖らずも最後に備ひ入  
れた一看護婦の慧眼は、令嬢の病が世に有り觸れた平凡な戀の病なることを看破し、  
殊に令嬢の意中の人物までも判明したがため、流石多年の病症も拭ふが如くに輕快し  
無事に平癒したとのことである。

右は嘘話のやうであるが、近頃實際あつたことで、この一實例を見ても、また以て  
今日の所謂大醫名醫なるものが、その専門に拘泥して之に囚はれる餘り常識的判斷に  
缺け、無學なる一看護婦にも劣ることを知り得られる。若し醫家がその専門に囚はれ  
ずに常識的に判斷したならば、夙に令嬢の病の原因を看破し、永い間その兩親に心配  
させるやうなことも無く、直ぐに病氣は平癒したに相違ない。

片思ひや失戀に因る悲哀煩悶から身體が弱くなつて、結核病に侵されることの多いのは明白な事實であるが、江戸時代に於ては、今日謂ふ處の肺結核、即ち漢方の「癆咳」「癆瘵」が戀の病の別名のやうになつてゐた。寛文版の「花花草草」に、「癆瘵、戀也」と見え、「新色三つ巴」には、「思ひきれぬわくの絲の亂れ、心の結ばれは、慕ふ戀男にとかさねば癆咳と云ふ病となり」といひ、「吉原徒然草」に、「寶永の頃、おしなべて二三日、人の咳氣煩ふこと侍りしとぞ、彼の若衆女を見たがりし戀風なりと云ひ侍りし」とある。

## 露 出 症

露出症 Exhibitionismus とは病的衝動の下に周圍に對する顧慮もなく、自己の恥部を露出して之を異性に示して、快を感じる一種の性慾倒錯である。而て此の如き猥褻行爲を演ずる者の多くは、單にその恥部を露出することゝ、異性が之を見て感情的反應を起すことゝによつて満足を覺ゆるのであつて別に進んで異性に接觸せんとするが如き慾望は無く、加之、性的興奮の徴候も缺如せるか或は著るしくないので普通である。

露出症は從來種々に分類せられた。メーデルは之を三種に區別し、一は小兒性露出症 Infantiler Exhibitionismus で、小兒に於て通常認むるが如く、その陰部を他に示し、また他人の陰部を窺ひ見んとする好奇的慾望より起るもの、二に老人性露出症 Seniler Exhibitionismus で、陰萎に陥りたるものが性的満足を惹起する一手段として

行はるゝもの、三は性慾倒錯に基因するものとの三種としたが併し此の如き分類は、モルの云つた如く決して完全なものと稱することが出来ない。クラフトエビングは、露出症を四種に分ち、(一)脳脊髄病のために精神薄弱となり且つ意識の濁濁すると共に陰萎となりたる結果として起る處の後天状態、(二)癲癇患者にして意識の昏朦状態の下に之を行ふもの、(三)神經精神衰弱症に因るもの、(四)重き遺傳素因を有する發作的衝動なりとした。モルは本症を二種に大別し、一は多少先天的異常あるも精神は健全なるか或は可なり健全なもの、二は精神病、神經病或は酒精中毒によりて精神機能の減弱せるものとの二種とした。

さりながら上記の分類は、私共より之を觀るに必ずしも完全なるものとは謂はれない。是等よりも寧ろ妥當なるはガルニエーの分類であつて、即ち、露出症の最も定型的なものは強迫觀念の衝動より起るものであり、その他、精神薄弱、昏朦状態に陥る精神障、癲癇、麻痺性痴呆、酒精中毒等に因る者である。しかし分類法の當否如何

は兎も角、露出症が殆ど病的現象として起ることは疑ふべからざる處で、サイフェルの説に依れば、その八十六人中十八人は癲癇、十七人は痴呆、十三人は變質者、八人は神經衰弱症患者があつた。然るにブルグルは「露出」Exhibitionと「露出症」との二者を區別するの要あることを説き、前者は精神の健康なる者に於ても之を認むることあれども、後者に至ては専ら精神異常ある者に於てのみ行はれ、再三反覆して之を爲すものである。

普通の人間に於ても種々の動機より陰部を露出する者がある。例へば東歐の一地方に於ては他人に對して輕蔑侮辱の意を表すがために或は一種の迷信より自己の陰部や臀部を故意に人の面前に露出するものがあり、また、シユレンク・ノツチングの云つた如く、小兒時代より一種の遊戯として互ひにその陰部を示し合ふことに慣れてゐる者が露出症に陥る傾向のあることは論ずる迄もない。其他、手淫に耽る者は自體に對する羞恥感情が減失し、且つ異性に對して陰部を露出せんとするが如き異常の衝動

の起る場合に之を抑制する觀念の缺如するがために平氣で陰部を露出するやうになるのである。

白痴、痴愚の如き全然道德的觀念、羞恥感情に缺如せるものが陰部を露出することは固より異とするに足らない。エミングハウスの報告した四十一歳の一男子は軽度の腦水腫があり精神の發育も不完全であつて、既に十六歳の頃より公園或は公會の席上に於て、少女或は下婢の面前に於て陰部を露出し、口笛を鳴らして故意に人を呼び、その陰部を示すことに努めた。若し之を嘲罵するものがあると再びその場所に姿を現はさなかつたが、他所に至つて復たもや醜行を演じた。

腦脊髓の疾患に罹りて意識が溷濁し、且つ生殖機能が衰弱して、性交を行ふことはざるも性欲に對する統御作用の缺乏するものに露出症を見ることが尠なく無い。麻痺性痴呆、老耄性痴呆、酒精中毒等の病者に於ける露出症は之に屬する。

前記の精神異常者は單にその陰部を異性の前に示すことによつて満足を感じ或は相

手の性欲を挑發し得たとの想像によつて、興奮と満足とを覺えるのである。ラスグーの記述した六十一歳の一高等官は自宅の向ひ側に住める六歳の幼女に對して、十四日間毎日その陰部を窓より出して示した。その前を通り過ぐるものは之を見て大に哄笑しその醜行を罵り辱しむるも本人は恬乎として之を顧みるの色なく、羞恥感情は全く缺けてゐた。その後、腦病を患つて死んだ。蓋し老耄性痴呆に因る露出症であらう。

精神が朦朧状態に陥つて行爲に關する意識を缺き、衝動的に陰部を露出するが如きものは癲癇患者に認められる。クラメールの記述した三十七歳の中學教師は十六歳の頃より癲癇に罹り、その發作は唯だ夜間に於て起るのみであつて、妻女の外には之を知る者も無かつたが、可なり久しい以前よりその住所を同うする土地の婦人や處女から、往來の途上に於て未知の紳士がその陰部を彼女達の面前に露出すると云ふことを訴へ出られた。そして彼女達の告ぐる處に依ると、その紳士は強く女の顔を凝視し、その顔色は甚だ蒼白であつたといふ。この紳士とは即ち中學教師のことであるが、そ

の後、この教師と相識の間柄なる一婦人が途上に於て同様の醜行に遭つたので遂に之を訴へ出た結果、本人は拘引せられた。その自白に依ると、彼はその醜行に就て何等意識する處なく、たゞ途上に於て放尿を試みたるが如き感じがする迄であつた。彼は癲狂院に於て六週間に亘り精細に診査されたが、夜間に於て癲癇發作の起ること、そしてこの六週間に二回發作のあつたことが確定された。

シュレンク・ノツチングは神經衰弱症患者に於ける露出症の實例を記述した。それは強迫的衝動のために發作するもので、三十一歳の書工であつた。再三此の醜行を演じたがために訴へられたのであるが、二十歳以來、毎日自瀆行爲を行ひ、空想及び情慾は容易に興奮し、しかも性交を行うも未だ満足を感じたことなく、その性慾を發動せしめんがためには、異性の面前に陰部を露出し、遂にそれが一の強迫的行爲となつて起るやうになつた。彼は重き神經衰弱症を患ひ、身體に勢力なく、容易に涕泣し、自殺的觀念があり、道德的觀念及び叡智も著るしく減弱してゐた。此の如き強迫的衝動

より起る處の露出症は他の精神異常に於ても認められる。リマンの報告せし一例は、高等中學の一教師で、伯林の一動物園に於て婦人或は幼女の面前に於て突然陰部を露出したがために拘引されたものであるが彼は此の醜行を演ずる瞬間に於ては意識を缺如するも一定時間を経た後には元に復して深くその醜行を耻ぢ面を掩うて遁げ去るのである。平素は品行端正であつて、また癲癇にも罹りしこと無きにも拘はらず、屢々衝動的に露出の觀念が起り之を抑制すること能はざるまゝに夢心地になつて衣を褰げながら陰部を露出し、諸所を徘徊して之を示すのである。彼は一種のヒポコンドリー症の患者で特異なる異常の感情を有せるものであつた。

トロコンは精神状態が普通でありながら、而も強迫的衝動のために露出の醜行を演せる三十三歳の既婚勞働者に就て報告したことがある。彼は數年に亘りて時々店頭の女性に對して陰部を露出した。併し之に向つて言葉をかけることも無く、また接近することもない。彼は至て謙遜で且つ能く働き、夫婦の仲も睦まじい、家長としても申

分のない男でした。しかし、陰氣な性質で神経質な處がありその姉妹は精神薄弱者であつた。彼はその猥褻行爲のために拘引され、その精神状態を鑑定されたがその結果は抑制すべからざる病的衝動より露出をなすことが判明したので放免された。

さりながら露出者の中には異性に醜陋なる行爲を見せて不意に驚かせたり或はその通げるのを追跡して畏怖せしめたりすることによつて快感をおぼゆるやうな「ザヂスムス」の變態もある。此様な者の中には、陰萎であつて、凌辱の如き暴行的態度に出づることの不能なるがために這般の行爲を演ずるものが尠くは無い。されば、メルツバッハ等は一部の露出症を「ザヂスムス」の變型と看做した。しかし、また他の一面に於ては、異性より嘲笑侮蔑せられたさに好んで醜行をなす所の「マンヒスムス」的露出者のあることをも知らねばならぬ。ルツソーの如きは蓋しその好例である。彼の著「懺悔録」に於て、下記の如き自白をなした。「私の性慾は益々旺盛となつて、しかも之を遂行することが出来ないがため、奇異なる方法を以て之を刺戟した。

それは暗黒なる並木或は僻在せる地を選んで遙かに行路の婦人を望みつゝ、猥褻にして且つ滑稽なる一種の態度を示すことである。婦人の見る處は私の猥褻なる態度に非ずして寧ろその滑稽なる態度であつた。しかし婦人をして之を目撃せしめる私の馬鹿らしき快感は實に譬ふるに物もない程である。云々。」

### 男子同性愛のロマンス

男色の盛んであつた封建時代では、男子同士の関係が恰も異性に對するが如き有様となつて双方の間に愛情が起り、従つて嫉妬怨恨等の思ひが生じて、他人を殺傷し、或は相共に自殺して、男同士情死するやうなことも起つた。

寛永三年の頃、成瀬豊後守が二代將軍秀忠の寵童小山長門といふ美少年と關係したために、兩人共に切腹を命せられ、同じ十七年には、伊丹左京といふ少年が男色に關する嫉妬から、細野主膳といふ者を殺害し切腹を命せられたのに、左京と契つた舟川采女といふ少年が之を聞いて、共に自殺したことがある。また天明元年には、駿河の國なる寶泰寺の下男某が、同寺の所化僧なる十八歳の美少年といんぎんを通じた結果、情死したこともあつた。

また一方には、美少年の容色に思ひ焦れて熱烈なる情を寄すること、さながら異性

に對すると等しいやうな者もあつた。明和五年版の「麓の色」に次の如き記事がある。之を見ても同性間の愛情の中には、如何にその情緒が濃厚であつて、異性愛も管ならざりし程のロマンチックなものゝあつたかを知ることが出来る。

昔、劇場に何某とか云ひけん色子あり。常に樂屋または茶屋へ行く時、河岸の小屋に住居する非人、路次に彷徨うて、この色子を見ること、日々に怠らず。或時雪降りける朝、彼の色子樂屋に行きけるに、件の非人例の如く彷徨うて居たりければ、色子わざと木履を踏みかへして、鼻緒惡きとて連れたる男に木履を取りにやり、その間に非人を招き、其方が日頃の氣色、我に熱心と見えたり。今夜必ず庭の路次より忍ぶべしと約束し、その夜は不快なりとて茶屋へも行かず、一間の爐に釜をかけた湯をわかせ、密かに路次の戸をばし家内の者をも常より早く寝させて待ちあひるに、深更に及び件の非人忍び來りければ、釜の湯にて足を暖めさせなどして臥房に伴ひ、積る思ひを晴らさせ、別れに臨んで和巾に包みたる金を與へてかへしけ

り。然るに件の非人、その翌日小屋を出て、行方知れずなりぬ。察するに、なまじゝに近所に居れば、猶ほ彌増す思ひ色に出で、色子の名を汚さんことを厭ひて、遠く身退けるなるべしと云へり云々。

男色の盛んであつた時代は、社會の反映たる文學も、男色を材料としたものが多く現はれ、彼の有名なる西鶴の「男色大鑑」を始め、「男色花の染衣」「男色子鑑」「男色比翼鳥」「男色太平記」など、稱するが如き種々の作物が刊行されたのみならず、歌舞伎狂言にも之を仕組むものが尠くは無かつた。その中から「藝鑑」にある「氏神詣」といふ狂言の一節を左に抄出して見よう。

奴共は景色をながめ、小姓の器量を評判、「艶之丞がよい」「いや、おらは友彌殿にほれた」といろ／＼噂するを侍出で、「何をたわ言、御小姓の噂、今一言いうてみよ」と咎められて「そりやこそ」とあとをも見ずに遁げ入れば、巫子、御神樂々々々と呼はりて侍は入る所へ、艶之丞出で、神前に出で柏子うち祈念する折から、

茶道珍才後に立ち、艶之丞が袖をひき小聲になつて、「其許の御ため申さん殿様の御寵愛は其許御一人と思ひしに、この間は専ら友彌殿に御鼻毛をのばし玉ふ。拙者は御使ひに參る、こなたは御主へ參れと仰付けられたのは、あとにて友彌殿と契らせ玉ふ心、御油斷あるな」とたきつけて御使に走り入る。艶之丞は腹をたて、「さてさて友彌め、憎や腹だちや」と妬みのせりふある所へ云々。

これを見ても、當時の諸侯間に男色の行はれ、従つて之を中心として、中傷、讒誣、嫉妬等の起つたことが推知し得られる。

遊女が落籍せられるのと同じやうに、男色を賣つた俳優の中にも、富豪に身受けせられた者は尠くは無かつた。その中にも藤田小平次が淀屋辰五郎に身受けせられ、嵐喜代三郎が紀伊國屋文左衛門に落籍されたことなどは著明なる事例であつた。幕末から明治の初期にかけて、有名な女形俳優であつた澤村田之助は、上野明玉院の住職の寵幸をうけて、澤山の金を絞り上げたが、その後住職が寺を逐ひ出されて田之助の家



に來た時、昔の恩義を無視して、住職を足蹴にして無情にも逐ひ出した。その怨みの祟りで、田之助が脱疽といふ難病に罹り、兩脚を失つたのだと噂されたことがある。これも男色に絡まるローマンズの一たるを失はない。

淨瑠璃や演劇で名高い八百屋お七の情人吉三郎は、駒込圓林寺の小姓で、住職豪觀の念者であつた。お七の家が全焼して親と共に此の寺に寄寓した時、彼女は吉三郎と人目を忍ぶ戀仲となつた。それを豪觀が知つて嫉妬心に燃ゆる餘り、お七が歸家して後、兩人間の音信往來を妨げたのが原因となつて、放火事件が持ち上つたのである。さればこれまた男士の同性愛から起つたローマンズの一である。

### コカイン中毒と同性愛

「コカイン」Kokain は人の知るが如く、外科的小手術に賞用せらるゝ局所麻醉劑であつて、末稍知覺神經を麻醉する作用のある他、モルフィウム、アルコホル等の全身麻醉藥に於けると同様に腦髓にも作用して愉悅の感を惹起し、恍惚状態に導く作用がある。コカインを吸入し或は内用し或は皮下に注射して刹那の快樂を貪はり遂に慢性中毒に陥るものが世に尠く無い。殊に獨逸の如きは、歐洲戰亂以來、生活苦に因る憂愁煩悶焦躁を一時なりとも忘却せんがために「コカイン」を濫用する者が著るしく多くなり、隨つて慢性中毒患者の輩出するが如き有様となつた。支那に阿片中毒患者の多きが如く、獨逸に於てはコカイン中毒者が尠く無いのである。處で茲に叙説したいことは「コカイン」中毒患者には性慾の異常をも來たすことで、殊に同性愛に陥る傾向の認めらるゝ事實である。

抑々性慾に及ぼす藥劑は、その作用によつて之を二種に大別する。一は性慾を亢進し「ポテンツ」Potenz（性的能力）を昂盛する催情劑 Aphrodisiaka 他は之と反對に作用する制情劑 Anaphrodisiaka である。麻酔劑の中、その副作用として、初めは性慾を發揚し、次で之を減退する共に「ポテンツ」をも減失せしめるものは、「モルフィウム」「アルコホル」等で、此等の麻酔藥に因る性的異常は、性生活の分量變化であるが、之に對して性生活の性質的變化を來たして同性を愛し（性慾轉倒 Inversion）或は性的行爲の變化（性慾の錯倒 Perversion）を喚起する麻酔藥がある。之に屬するのは今日までの實驗例に徴するに「アルコホル」及「コカイン」である。

「コカイン」中毒と同性愛との間に一定の關係あることに就ては、近年來諸學者の確認せる處で、マークス、シルデル、デュブレ、ローグ、マイエル、ヨエル等は相前後して這般の實驗と之に關する考察とを發表したが、更に最近に至つてヨエル及びフレンケルは、「コカイン中毒と同性愛」Kokainismus und Homosexualität なる題

目の下にその所見を精細に論述し、之を獨逸醫事週報本年度三十八號の紙上に公にした。

「コカイン」中毒と、同性愛との關係は、之を二種に分つて觀察するの要がある。一は、「コカイン」を嗜好する者は生來同性愛の素質傾向を具へてゐると云ふこと、二は性慾の通常なる者が「コカイン」中毒によつて、性慾の轉倒を來たすと云ふことである。先づ第一の者より説き初めよう。

同性愛の素質傾向あるものは、自己の性慾の變態なることを能く自覺してゐるから、勉めて之を抑制して外部に現はさないやうにするが、併し性慾が十分に満足せられないがために、煩悶焦燥を感ぜざるを得ない。故にそれを一時なりとも忘却せんがために麻酔劑を攝取することになる。獨逸や奧國等に於ては酒精飲料の外に「コカイン」が流行してゐるので、同性愛の素質あるものは之を濫用することが稀でない。そして平素は、その轉倒せる性慾を抑壓してゐても、「コカイン」を吸入或は内用して麻酔狀

態に陥ると、自制克己の念が減失する結果、その本性の暴露となつて同性に對する挑發行爲が演ぜられるやうになる。此の如き事實は「アルコホール」に因に麻醉状態に於ても同様に認めらるゝ處で、ドイツチユの實驗せし三十九歳の既婚男子は、平素は普通であるが、酒に酔ふと同性に戀着する。此の男は異性同性を共愛する兩性愛者 Der Bisexuelle であつて、平素は同性愛の性向を抑制してゐても、一たび酩酊すると、その抑壓作用が消失するがために同性に對して性慾の満足を求めんとする行動が現はれてくるのである。

性慾の通常なる男子が「コカイン」中毒のために同性愛者に變化することの稀でないのは如何なる譯であるか。それには二種の原因がある。一は、中毒のために人格に變化を來たして、暗示に感じ易くなり、且つ好奇心及び感覺的快樂に對する欲求が強くなつてくることである。「コカイン」中毒患者に暗示感性の亢盛することは下記の一實例に徴しても明かである。それは、ヨエールの實驗した二十歳の給仕で、重症の「コ

カイン」中毒に罹つてゐた者であるが、一日他人より「強盜をなせよ」との暗示を受けて、同じく中毒仲間の家宅に闖入し、本人は實際に強盜したことを確信して伯林より遁走したほど、暗示に感じ易かつた。そして、その性慾が轉倒して同性愛的行動を演ずるやうになつたのも矢張り暗示感性の強くなつた結果であつた。手淫が暗示によつて屢々行はるゝが如くに、同性愛的行動も亦た他よりの暗示を受けて之を模倣するより起ることがある。されば、暗示に感じ易い「コカイン」中毒者に同性愛の起ることのあるのは蓋し自明の理であらねばならぬ。これは第一の原因であるが、併しそれよりも主要なる第二の原因は「コカイン」中毒には、勃起機能（ポテンツ）が減退消失しても色情（リビドー）には變化なく、却つて亢進することである。此の如く「ポテンツ」と「リビドー」との不權衡が原因となつて同性愛が起るやうになる。その理由は、「ポテンツ」の減失せる男子は女性に満足を與へることは出来ないけれども、その色情は依然として存在し、而も却て亢進するがために、自己の性慾満足を廢止する

ことは出来ない。そのため性的対象を變換し、性慾を満足せしめる相手を同性に求めることになるのである。アツシヤフエンブルクの實驗した一男子は身心共に健全であり性慾も常態であつたが、慢性コカイン中毒に罹つてより病妻の不在中は同性に對して燃ゆるが如き愛慾が起つて之を抑へようと思つても殆んど抑へることが出来なかつた。そして此の愛慾の起るは、いつも陰部に於ける快感的刺戟状態の亢進であつた。されば「コカイン」中毒に於ける此種の同性愛は固より病的であつても、併し眞正の性慾轉倒でなく、「ポテンツ」と色情との不權衡となるがため「ポテンツ」を刺戟すべき対象を同性に求むるに過ぎないのである。

### 「兎園小説」に記述せる男性的女子と女性的男子

「兎園小説」は文豪曲馬琴が種々の異聞奇談を蒐載せる隨筆書で、その餘録の中に男性的女子と女性的男子に關する記事がある。多少興味があるから、その要旨を左に抄出する。

#### 男性的女子

麴町十三町目なる蕎麥屋の下男に吉五郎といふ者あり。此者實は女子なり。人久しく之を知らず年二十七八許。月代を剃り常に腹かけを堅くかけて乳房を顯さず、脊中に大なる文身あり。俗に金太郎小僧といふ者の形を彫りたり。此の他手足の甲までもほり物せぬ所なし。そのほり物に處々朱をさしたれば、青紅まじりてすさまじ。丸顔ふとり肉にて大がらなり。その働き男に異なることなし。始めは四谷新宿なる手引茶屋にあり、その後、件の蕎麥屋に來りて勤めたりとぞ。誰れ云ふとなく渠は偽男なりと

いふ風聞ありければにや、四谷大宗寺横町なる博奕うち、これと通じて男子を生まれせけり。これにより里の評判甚しかりしかば、蕎麥屋の主人吉五郎の身のいとまを取らせ出生の男子は主人引き取りて養育す。かくて吉五郎は木挽町の邊に赴きてありし程、今茲天保三年壬辰秋九月、町奉行所へ召し捕へられて入牢したり。これが吟味のため、奉行所へ召し呼るゝとて牢屋敷より引出さるゝ折は、小傳馬町邊群集して觀る者堵の如くなりしとぞ。或は云ふ。此者は他郷にて良人を殺害して遁れて江戸に來り偽男子となりぬ。世を忍ぶためなりなど聞えしかども虚實定かならず。四谷の里人に此のことを尋ねしに、何の故に男子になりたるか、その故は詳ならず。

女性的男子

四谷大番町なる大番與力某甲の弟におかつと云ふものあり。幼少の頃よりその身の好みにやありけんよろづ女子の如くにてありしが、成長してもその形貌を更めず、髪も鬘を出し、丸髻にして櫛笄をさしたり。衣裳は勿論女の如くに廣き帯をしたれば、

うち見る所、誰も男ならんとは思はねど、心をつけて見れば歩きさま女子の如くならず、今茲四十歳許なるべし、妻もあり子供も幾人かあり針醫を業とす。四谷にて之ををんな男と唱へて知らざるものなし。年來かゝる男形の人なれど悪事は聞えず、且つ與力の弟なればにや、上より咎もあらであるなれば、彼の偽男吉五郎の此のおかつ男をうらやましく思ひて男の妻になりたるか、未だ知るべからずともいへり。云々。

## 女になりすました男

Ⅱ性慾顛倒症の一例Ⅱ

此の頃古雑誌を整理した處、大正七年十月發行の「夢の世界」に事實奇談「女になつた男」と題せるローマンズの記事が偶々眼にとまつた。男性でありながら全く女性になりすました顯著なる性慾顛倒症の一例として茲にその要旨を披抄することにした。

ある年の春、十七八歳位の美しい女が名古屋驛内をうろついて、巡査に誰何されたことから話が初まる。女は大分縣生れの者で姓名は荒木しげ子十七歳と答へた。父の友人某が名古屋の專賣支局に奉職してゐるので、それを頼つて來た處が、某は岐阜に轉勤したため逢ふことが出來ず、さりとて今は一文の旅費もないから、岐阜まで行くことも出來ないと言ふのであつた。

巡査Yは彼女の事情を憐んで旅費を惠み、岐阜へ出立させた。と次の列車で直ぐ引きかへして來た女の言ふには、岐阜で某に會つた處、荒木に長男のあつたことは知つて居つてゐるが、長女のあることは聞いたことが無い、しかし、話の様子で見ると荒木の長女らしいが、若い女の身空で、他國を彷徨ふのは宜しくないから、間違ひのないうちに早く國へ歸れよと言つて十圓の金を惠まれたから、又名古屋へ戻つて來たと云つた。巡査は肯いて、更にしげ子を知己の寫眞師兼玉突業のN方へ預けた。それは是まで彼女が神戸に居て酌婦や寫眞師の見習をつとめ、將來寫眞屋になりたいと云ふ希望を漏らしたためであつた。處がその寫眞屋は餘り繁昌せず、追ひ／＼家計が困難になつてきたので、Y巡査に女の引取り方を迫つたから、巡査は仕方なしに、今名古屋へ彷徨ひ來つたものゝ如くに装はせて、東海佛敎慈惠學校へ救濟方をしげ子自身に申込ませた。

この學校は主として細民の子弟を收容し、無月謝の上に學用品を給し、尋常六箇年

の課程を五箇年間に修業させるを目的とし、別に施療部などを開いてゐるので、時々世路に窮したも客が舞ひこむ。即ちしげ子はその一人だから、八幡校長夫妻は氣の毒がつて二三日逗留させて置いた。彼女が學校へきた時には、お召の被布に袖なしの銘仙の單衣一枚を着た不調和な見すばらしい扮装であつたが、本人はそれを大に氣にしてゐたらしく、來ると直ぐ借衣を望んだ處に、女らしい慾望が見えまた萬事の舉動も至て淑かであつて、只校長夫妻が共浴も勸めても、言葉を左右に託して入浴しなかつたことが疑問であつただけで、その外には不審らしい點も見えなかつた。

處が數日の後に、江川町署の刑事が出張して、突然しげ子を引致して行つた。學校では驚いて、偕は何か犯罪のあつた者に相違ないと、不安の思ひで経過を眺めてゐると、間もなく刑事が女を送りかへし、署長からは、然るべく保護方を依頼してきた。

何で取調べられたかと云ふと、彼女が最初宿泊した驛前の宿屋のものが、彼女を喰ひ者にしようとして果たさなかつた意趣がへしに、何うも可笑しい舉動があると警察

署に密告したが爲であつたが取調べの結果は別に犯罪行爲もないものと判別して直ぐ放還されたのであつた。けれどもその取調中に意外な珍事が發見された。それは、しげ子が女装はして居るが純然たる男子であることだ。本人も恐れ入つて自白したが、事情憐むべき點があるからと云ふので、署長から學校へ言葉を添へたものであつた。

學校では甚だその處置に窮したが、今更逐ひ出す譯にも行かないから、その儘に差置くと、この女装男子の珍聞が各新聞に出た爲、忽ち市中の大評判となつたので、學校では非常の迷惑を感じた兎角するうちに、女装男子しげ子を種にして金儲けしようとする輩がしげ子に眼をつけ、種々の誘惑が來た中にも音羽屋といふ劇場からしげ子を俳優に出してくれたら、學校へ寄附金をすると云ふ條件で交渉してきた。校長は無論拒絶した。けれども劇場の方では中々斷念せず、密かに第二の手段として、しげ子に縮緬の衣裳を贈つて巧みに勧誘した。衣裳を何物よりも喜び且つ欲しがつてゐたしげ子は之に動かされ、ある夜學校を脱出して音羽屋へ駆け込んだ。

それと知つた學校では、警察署と相談して、しげ子を引取り、同時に國許へ通知することに決めた。刑事が劇場へ行つてしげ子を連れ戻り、警察署の刑事室に一泊させる間に、校長から國許の實父へ引取方を電報で照會した。

すると、直ぐ行くといふ返電があつて、二三日過ぎてから實父がその弟と共に郷里から出てきた親子が對面したのは四五年振りであつた。そして父の話によつて、しげ子の性的變化が明瞭になつた。彼が繁夫と云ふ男子であることは父が確認した。生れて十二歳になる頃までは普通の男兒と異つたこともなく成長し、小學高等科を卒業した後は、校長の勧めによつて郷里から二三里距つた町にある教員養成所のやうな所へ入れられて、親の手許を離れたのが、彼の性的變化を來たす第一歩であつた。そこは寄宿舎制度で、繁夫も一室を與へられて勉強してゐたが何時の間にその机の上に鏡が飾られ、香油や紅白粉や洗ひ粉の壘や袋などが置かれるやうになつた。初めは只めかすのみと思はれたのが、逐次に進んで半襟をかけて見たり、紅い湯巻を纏つてみ

たり、女の眞似をし始めて、友達も女とばかり遊ぶやうになつた。

これを發見した校長は大いに驚き、父にその次第を報じたので、父も驚き、繁夫を養成所から引取つて連れかへり、こと更質素に男装させて家事を手傳はせた處が、それが餘程苦痛のやうで、今度は決して女の眞似はしないから、今一度養成所へやつて呉れと惻願するので、固く戒めて再び入所させた處が、一月経たぬ内に復た校長から父親を呼びにきた。もしやと思つて行くと、果然以前よりも激しい女装振りに、父は驚きもし怒りもして連れ戻り一層嚴重に窮命させて置いたのを、何時の間にか脱け出して出奔した。それは彼が十四歳の時であつた。

それから四年餘り、神戸大阪を流浪してゐる内に全く女になり澄し、前にも書いた通り、料理店の仲居や寫眞屋の見習になつて、面白いやうな辛いやうな世を送つてゐたが、名古屋へ流れこんでその後の消息を知らなかつた郷里の人々を驚かしたのであつた。



その父は或る官吏を勤めてゐて、素養もあり、温和な人で、繁夫の外にその下になる男女の子供が二人あつた。その相續者たるべき長男の異様な風を見た時、父は男泣きに泣いた。當時は只珍らしがつて、がやくと騒いだ丈であつて、誰一人斷案を下した者は無かつたけれど、父親の話と、その後の経過とを綜合すると、性慾の變化と共に全精神機能の變化してゐる性慾倒錯症の一人である。

彼は何よりも頭髮と衣服とに苦心した。頭髮は初め髻を入れて相應に繕つてゐたが、後に地髪が延びてから自ら思ふ形に結つた。それがまた巧みであつたが、多く庇髪に結つてゐた。衣服の着付も亦巧みで、ある縁女の扮粧を引受けて褒められたこともあつた。姿態は固より柔艶で、瞥見には何うしても女としか見られなかつた。その上にも彼は女と見せることに腐心して乳房を大きくするために綿を包んでゐた時もある。そして共浴は嫌がつたけれども、學校の雇婆さんなどは、よく同衾して臥したものだ、その時は兩脚をキツチリと包んで身動きもしなかつた。しかし、自分よ

り美しい女、美しく見える女に對しては一種の嫉妬心を有つてゐて、藝妓など、同席することを好まない。しかし、その酌する時の容子の巧さは驅け出しの藝者の到底及ぶ所でなかつた。

さて郷里から迎ひにきた父親は、歸郷を好まない繁夫を引立てるやうにして連れ戻つた。そして途中の宿屋で嫌がるのを無理に抑へつけ、頭髮を五分刈に刈つて了ひ、色目のない男の衣服に着かへさせて宅へ置いたが、彼はその無趣味な殺風景な生活に堪へられないで、再度國許を出奔して名古屋へ戻つた。

その時は最早學校に手頼らないで、直ぐ音羽屋へ入座して俳優になつた。女らしいとは云ふものゝ、茶花の道は勿論、遊藝は何一つ心得がないのだから、舞臺の人となつても前途の見込がある譯でなかつた。けれども彼としては幾分虚榮心を満足させ、看客は珍らしいのを喧傳して毎日の大入りつゞき、太夫元は懷中を肥やして莞爾りものだつたのが僥倖であつた。

處が忍耐のない性癖として彼は間もなく俳優が嫌やになり、フイと脱退してから酌婦になつて二三軒の料理店を轉々して歩いた。それが又妙なもので、彼のゐる間はその料理店が従前に幾倍した繁昌で、彼は到る處に人氣者として待たれたものだ。

この華やかな生活のために彼の名は各地に知れ渡つて、大阪東京などから續々彼に書束を寄せる好事者が出來た。或は身の上を誇大に吹聴して結婚を申込みもあれば、或は繁子の境遇に同情して保護を申込み者もあつた中に、大阪の某といふ男は、最も懇切な書面を寄來したので、繁子が遙々尋ね行くと、歡んで優待し、數日滞在させた上に歸るに當つて金三十圓と衣裳一襲とを贈り、その後、二三回も名古屋まで逢ひにきた。

その時代のしげ子は、人はちやはや言つてくれる。衣裳は出來る。金は貯る。虚榮心は油をつけた様に燃え上つて、今が最得意の時であつたが、何うしてか急に心機一轉し、詫びを八幡校長に入れて再び慈惠學校へ止宿することになつた。校長はその心

の稍鎮つた機を見て剃髪をすゝめたから彼は直ちに同意し、苦心して延ばした黒髪を根もとから切つて了ひ、青道心となつて市外の或る庵室へ入つたが、とても浮世から遠ざかつて行ひ澄ませる柄でなく、間もなく其處を飛び出して復た頭髪を蓄へ始めた。そして校長の周旋で、岐阜縣大垣市の或る旅館の家庭附女中となつてから彼は再び名古屋に歸らなかつた。

彼は大垣にゐる内、偶然としたことから、新聞記者のTと懇意な仲となつて、結局旅館から暇を取り、一戸を借りてTと同棲した。即ちTの妻となつたのである。處がTの親族がそれを聞き、世間に女がないかの様に、彼様な化物を女房にするとは何事だ。そんな者には親類つき合はしないぞと、手酷しく抗議をもち出したので、飽きもあかれもせぬ中を別れて、しげ子は愛知縣の一宮町へ流れ寄つた。

そこで女髪結ひを渡世としてゐる内に、世話するものがあつて、ある蠶絲會社員Kと結婚し大に女房振りを發揮してゐたが、Kは家事上の都合で會社を辭し郷里の實家

に歸らねばならないことになつて、その折離縁話も出たけれど、しげ子は何んな山奥でも良人について行く決心で實家に伴はれ、今は岐阜縣〇〇村の實家で世話女房として燻つてゐる。

それがもうかれこれ三年餘りになつて、彼は今年二十六の中年増である。十七八の頃から見れば幾分か容色も衰へてゐるが、それでもまだ瓜實顔の眼元愛らしく、紅粉を粧つて、ちんと取りすますと中々の美人に見える。こゝに最も奇なことは彼の家は姑もあり小姑もあるが、しげ子はそれに仕へて三年以上無事に経過したと云ふことである。

### 同性愛の分類と假性異性愛

従来よりの區別に依れば同性愛には真假の二種がある。眞性の同性愛 *Echte Homosexualität* とは、先天的に性慾が顛倒し、異性には全然冷淡無頓着で、同性のみを愛慕する精神變質症であり、之に反して假性同性愛 *Pseudohomosexualität* とは、性慾は通常であつても、個人的の事情や境遇等によつて同性をも愛慕するものを云ふのである。例へば異性の肉に飽き疲れたもの（放蕩漢、賣笑婦の如きもの）或は異性に接觸することの不可能なるもの（僧尼、囚徒の如きもの）或は友情の熱烈なるもの、或は神経衰弱に罹りて異性と交會すること能はざるもの、或は妊娠、性病の感染を恐怖するものは同性愛に傾き易い。それ故、その性的行爲は變態であつても、性慾の倒錯に因るのではないから、假性同性愛と稱せられるのである。

男子に於ける同性愛、所謂男色の中に假性的の者も尠く無いことは前述の事實に觀

ても明かであるが、併し私の茲に述べてみたいのは、表面上では假性同性愛であつても、その實は、異性愛と殆んど異なる處の無いものである。モルは男子に於ける同性愛をば、その相手とする同性の年齢の差異によつて三種に區別した。その第一種は二十歳以上の成人男子を愛するもので、此の如きものは、生來性慾の顛倒してゐるがため同性に惹きつけられる處の眞性同性愛であるが、之に反して、第二種の十五歳乃至二十歳の青年男子を愛するもの、第三種の兒童を愛する者の多くは眞性の同性愛と看做することが出来ない。殊に美しい少年兒童は、その體質容貌が成人男子よりも女性に類似してゐるから、性慾の通常なる男子でも之に對して愛慾を懷く者のあることは敢て異とするに足らない。されば、美少年に對する愛慾は同性愛と云ふものゝ、その實は異性愛と同様であつて、唯だその異なる處は性的行爲の變態なる點にあるのみである。それ故、此の如きものを假性同性愛の中に入れるのは實際上不適當で寧ろ假性異性愛 Pseudoheterosexualität と稱する方が、その實に副つてゐると私は信ずる。這般の

名稱は私の勝手につけたものであるが、兎に角、同性愛の分類には眞假の同性愛の二種以外に更に假性異性愛と稱すべき者をも別つの要がある。

同性愛  
— 眞性同性愛（先天的性慾顛倒のために同性のみを愛するもの）  
— 假性同性愛（性慾は通常なるもその境遇事情等によつて同性をも愛するに至るもの）

假性異性愛（同性の容貌體質が異性に類似するが故に之を愛するもの）

さりながら、古代の希臘に大に行はれた男色、所謂「少年愛」 Junglingsliebe 「男童愛」 Knabenliebe なるものは、私の見る處を以てすれば、茲に説かんとする處の假性異性愛と看做す譯に往かない。蓋し希臘に行はれた男童愛、少年愛は肉體美の崇拜に基因せるもので「王冠を得んよりは美しき肉體をこそ得まほしけれ」といふ思想より殊に男性美を尊重し、就中、男子の十五六歳頃になつて漸く成熟期に入らんとする折の美しい血色や凛々しい姿勢をば、何よりも尊んだもので、美少年に關する多くの

物語を後世に遺したのであつた。それも顔貌ばかりでなく、四肢五體すべての筋肉姿勢の美しさを貴んだので、四年に一回開催せられたオリンピックの競技の如きも、要するに肉體の眞の訓練によつて身體各部の整つた美しい發達を促さうと云ふ催しに外ならなかつたのである。哲人ブラトーンは、その著「デアローグ」に於て、美少年シャームデスを一見した者のすべてが忽ち之を愛するの情を起したことを説いたが、それは彼等が美少年のいかにも男子らしい肉つきの善い血色の美しい容姿に憧憬したがためであつた。されば希臘に於ける同性愛は「美の崇拜」Schönheitsverehrungの一なる男性美の嘆賞に起因せるものであるから、假性異性愛と看做することは出来ないのである。

これに反して吾國に行はれた男色は主として假性異性愛と認めて可い。所謂美童美少年と稱せられたものは、何れも若い女のやうな優さしい容貌、纖麗なる體質の持主であつた許りでなく、なほその上にも脂粉を塗り紅を施して女性に模することに勉め

た。ことに江戸時代に於ける若衆や野郎は、殆んど女性化した男性であつた。平安朝時代の頃までは、女色を禁せられた僧侶や異性の肉に飽いた放縱の公卿等を相手にした美少年は、鎌倉時代以來、武士にも愛せられて戦陣にも従ひ、女色の代償となつてからは、男色の風が益々盛んとなり、更に江戸時代に入りて若衆歌舞伎が起り、女形俳優が現はれてより此等美少年の色を好むこと恰かも女色に於けると同様となつて、上下の階級を通じ所謂野郎買ひ蔭間買ひに憂き身をやつすが如き亂倫の習俗を生じてきた。

試みに江戸時代の男色に關する雜書や小説等を見よ。美少年の容姿を評するに女のやうに美しいとか、女にせまほしいとか云ふ風に殆んどその美の標準を女性に取つてゐる。「古今役者大全」に、女形の開祖たり右近源左衛門の容姿を記して「むかし男の舞の袖、女かと思れば男なりけり」といひ、西鶴の「男色大鑑」には、當時の美少年を評して「袖島市彌、川島敷馬、櫻山林之助、袖岡政之助、三枝歌仙など、美しき上

に女の如く、紅の脚布するなど、戀を含みてしほらしい」といひ、また「春田丹之助は、七歳の時より形定りて嬋娟一笑百媚の風情、見し人、男子と思はず」といひ、「伊藤小太夫に舞臺着を着せて鬢そのまゝ女にかはらず、風流なる面影」といひ、「吉田伊織、藤村半太夫、さながら風情は、繪に残せし昔し名を知る美女めきて時世粧の舞ひ振り、見し人これに泥まぬはなし」とある。

男色を賣る美少年が女装をしたのは既に元祿期よりのことで「西鶴置土産」に「おなじく女のすなるさし櫛、緋縮緬の二布して少ししたゝるき野郎」とある。最初は若衆姿であつたのが、次第に女性化して、染色の振袖を着、幅廣の帯をしめ、頭髮も鬢を出し、鬢も女に擬するやうになつた。これは明和安永以來の風習であつて、湯島の蔭間の如きはいづれも妙齡の婦女子のやうに装ひ、銀の雨天に、萬銘の定紋打つたのを頭に挿し、裾模様立やの字、虚無僧下駄を穿いて、新年の元旦などは振り袖姿愛らしく、追羽根をつく有様など、眞の女のやうであつたと云ふ。

是に依て之を觀ても、我國に於ける男色が假性異性愛であつたことが明かである。

彼の武骨一邊の薩摩健兒の間に能く行はれた男色でさへ、その相手は、眉目の美しい「よか稚兒」であつた。「人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬る」とうたはれた健兒の社には、種々の年齢的階級があつて、七八歳から十四五歳までのものを稚兒といひ、その中にも十二三歳以下のものを小稚兒、それより以上を長稚兒といひ、十五六歳に達すれば前髭を取らせ、それより二十二三歳までの間を二才にせといつたもので、最早や一人前の武士として任務に服する義務があり、二十四五歳に至て年齢長組に入りて始めて妻帯を許されたので、それ迄は假性異性愛の相手として主に「よか稚兒」を選んだのであつた。

異性に接觸するを許されないもの、またはそれに飽滿した男子が、女性に類似する容貌と體質とを有せる同性に愛慾を抱くやうになるのは、自然の傾向であつて、決して變態性慾と認むべきもので無い。たゞその性的行爲の異なるのみである。歐洲に於て

も女装せる男娼が尠く無いが、それに接する男子を悉く性慾の倒錯せるものと看做すことの出来ないのは無論である。女性の中に於ても、自分より年長で、舉動の活潑な男のやうに凛々しい同性に愛慾の起ることのあるのも、これ亦た假性異性愛と稱すべきものである。餘程前の話であるが、中村小時といふ一女性が男装をして、紅燈緑酒の巷に豪遊し、多くの藝妓に關係して、氣に入りの一藝妓を落籍し、妾としたことがあつた。此の女は頭だけは女であるが、身には濫い柄の着物に白博多の男帯をしめて、黒縮緬の羽織を着流し、足には繪子の股引を穿いて、懐には九寸五分を持つてゐた。青樓に遊ぶ時は、大名のやうに鷹揚にかまへて、酒に酔ふと、その同行せる妾に巫山戯たり、また他の藝妓と戯むれたりする有様は殆んど男の客にかはらなかつた。そして此女は始終相場をしたり、花を引いたりして世を送つてゐた。處が此女に引きかゝつて丸裸になつた藝妓も尠くなかつたが、その中にも故桂公爵の寵妾であつたお鯉の如きはその藝妓時代には彼女に惚れこんで、金を絞りとられたことがあり、また

小靜、兼吉といへる藝妓も同じく彼女に入れ揚げたといふことである。

これは要するに中村小時が女性でありながらもその風采舉動の男性的で鷹揚であり凛々しい處から、男性に對する戀心地と同様な深い關係となつたので、これ亦假性異性愛と稱すべきものである。

## 快樂殺人

|| 近年佛國及び獨逸に起りし實例 ||

人を殺傷することを至上の快樂とする變態行爲には二種の區別がある。一は性慾の満足或は性的感興を求めんがために異性を殺害するもので、之を快樂殺人 *Iustmord* といひ、「ザヂスムス」の人間によつて行はれる。他の一は單に人を殺害することを愉快とし、異性同性の別なく殺害するもので、之を殺人快樂 *Mordlust* と稱する。私は此の如きものを前者より區別せんがために特に「假性ザヂスムス」或は變型ザヂスムス *Pseudosadismus* oder *Parasadismus* とも稱したい。しかし、この殺人快樂とても、性慾の亢盛せる放縱淫蕩の人間によつて行はるゝことが多く、之を史實に徴しても般の紂王、我國では豊臣秀次、羅馬では、ネロ・チベリウム等の好んで行つたものである故、性的情調が多少でもその背景となつてゐることは、蓋し観察するに難くない。

い。されば快樂殺人と殺人快樂とは、恐らくは程度の差異あるに過ぎないものであらう。

さて快樂殺人のことに就ては、嘗て「變態性慾」の紙上に「性慾の倒錯に因る喰人」「所謂刺嬢漢」等の題目の下に叙説したこともあつたが、茲には近年獨逸と佛國とに起つた戦慄すべき實例を紹述し、世の中には此の如き恐るべき殺人鬼の徘徊することを警告したい。

千九百二十年二月の下旬、佛國は巴里に於て死刑に處せられたランドルーといへる一壯漢は色魔であつたと共に恐るべき快樂殺人者であつた。彼は千八百十四年以來巴里の郊外の諸所に家を借り、ギエー、フレミエ、ジュボンの變名を使つて新聞に求婚廣告を出し、幾多の婦人を引きよせて、たらし込んだ上、殺害したのである。しかし、その犯跡を巧みに隠蔽したがため、容易に發覺しなかつたが、それが始めて露顯の緒に就いたのは、千九百十九年の二月の初め、ラスコーといへる女が、姉のヒュイソン



が二年前フレミエといへる男と結婚しようとして片田舎のガンベールに旅立つたまま、行衛不明となつて歸宅しないと云ふ失踪の顛末をば、巴里の検事局に訴へ出でたことであつた。そして殆んど之と同時に他の二人の婦人も行衛不明になつたと云ふ失踪届が前後して提出された。その一人はコローンといへる寡婦、他の一人は、マルシヤジエといふ老嬢であつた。コローンはギエーと云ふ男と結婚し、一緒にガンベールに旅行に出掛けたまゝで歸つて来ないと云ひ、マルジエはフレミエといふ男と結婚して共に旅行の途に出でたが、それ以來行衛不明となつたといふのである。以上三名の婦人共に片田舎のガンベールに向つて旅立つた後失踪したと云ふ届出が相符合してゐるので、警官は早速ガンベールに出張して調査してみると、其處には、デュボンといふ巴里人が住んでゐて、この借宅には、いろ／＼の婦人が出入するといふ評判を聞いたので、直ちにデュボンといへる男の家を搜索した處が、大分以前に家を引拂つて、何處かに轉居したことが判つたがため已むを得ず引きかへした。然るにそれより二ヶ月許りを過

ぎて後、最初に失踪届を出したラスコーが、巴里の市中で、姉の結婚したフレミエといふ男に偶然出逢つたが、いつの間にかその姿を見失つたと更に届け出でた。そこで警官は巴里市中を仔細に探索する方針を執り、手を分つて、調査した結果、フレミエがギエーといふ名で、ロシユ・シール街に住んで居ることを突きとめたので、妻と稱する妙齡の女と同棲せる處を逮捕した。

これが即ちランドルーで、前記の如くフレミエ、ギエー、ジュボン等の變名を使用したことも判つた。そして彼を逮捕する際警官は更に家宅を搜索して一冊の控帳を發見し之によつて、千九百十四年以來彼の毒手にかゝつた幾多の婦人の姓名を知悉することが出来た。その婦人の數は二百八十三人の多きに達してゐるが、その中、姓名の判然とした行衛不明者は都合十人であつた。然るに、その死體は勿論、血痕さへ發見することも出来ず、殺人犯と認むべき有力の證據物件は一つも擧らなかつた程、巧みにその犯跡を隠蔽してあり、犯人も亦飽迄堅白同異の詭辯を弄して兇行を否定し無罪

を主張したけれども、裁判官は幾度も殺人罪を犯した兇漢なることを断定して死刑に處した。この事件は當時ランドルー事件と稱せられ江湖の視聽を聳動したもので、マタン新聞の如きは、毎日法廷に於ける公判の有様を報導して巴里人の好奇心を唆つたものである。

上記のランドルー事件と殆んど時を同うして、獨逸の伯林にも幾多の婦人が行衛不明になつた事件が突發した。その張本人はカール・グロツスマンといふ五十九歳の男子で、年は取つても色魔的手腕に長じ、妙齡の婦人をたらし込むことにかけては一種の天才を有つて居た。彼は言葉巧みに若い女をあやつり、自宅に引きずり込んで弄んだ上、殺害するのを何よりの快樂とした。その殺し方は如何にも残忍を極め、相手の女を打ち殺した後、その死體をメチャ／＼に寸斷し、肉を抉ぐり取つて肉屋に賣り、残りは、ストーブに入れて焼棄するのである。彼は無論變質徴候を具有せる精神異常者であつたが、裁判官に對してはその恐ろしい犯罪の有様を明確なる記憶を以て詳細

に陳述した。しかし、毫も悔悟の心も無ければ自責の念も無かつた。彼自身でその犯行の様様を書いた日記の中には、マルタといふ婦人を殺害した當時の光景を記して、「マルタは寢床の外で氣を失つて倒れて了つた。私はいつもの様に彼女を寢床の上に横へ、水で濕らしたハンケチでその頭を冷してやつた。しかし、彼女は三四時経つてもなほ生命を保つて頻りに苦悶呻吟してゐるので、引續いて頭を冷やしたが、遂に彼女の息は絶えて了つた。私はいゝ氣持になつて、寢床に倚りかゝりながら、靜かに寢こんだ」とあり、また「彼女の死體を處分するに數日あまりも掛つた。しかし、處分して了ふと氣の軽くなるのを覺えた」とある。蓋し死體の處分とは、肉を抉ぐり取つた殘骸を焼却することである。しかし、此の如き瘴猛なる殺人鬼も女には愛情を有つてゐたと見え、その殺した女の血潮に染めるハンケチをば、後生大事に仕舞ひこんであた。

以上の二例は近年佛獨に起つた快樂殺人の實例であるが、今から約三十五年前英國

の倫敦に於て死刑に處せられたネイル・クリームの殺人事件は殺人快樂と認むべきもので、毒藥ストリキニーネを以て手當り次第に賣笑婦を毒殺し、それを變名にて他人に通告し、その本人かその息が殺したかのやうに脅喝し世間を騒がすことをも快樂の一とした。

### 嫉妬に因る殺傷

人間の感情生活の中でも、最も熾烈に現はれる者の一は異性間の愛情である。その獲得と維持とのためには、名譽、財産、生命までも犠牲に供して悔ひない者が頗る多い。「君が一夜の情には我が百年の命も惜しからず」とか「君と寝ようか、五千石取らうか、何の五千石、君と寝よう」とか云ふやうに、戀愛のためには自己といふ立場を忘れ、名譽も地位も擲ち、生命まで棄てゝも厭はない。「戀は人を盲目にす」といへる諺は實際上の經驗から出でた眞實の言葉である。此の如く愛情が最も強烈に現はれるのと同様に、その反面に於て愛が裏切られ、愛人に背むかれた場合にも、之に對する嫉妬の感情より理性をも良心をも失ひ、所謂可愛さ餘つて憎さが百倍といふやうに、復讐的氣分も加味せられて愛の唯一對象たる異性を殺傷し、それによつて激昂せる嫉妬の感情を緩和せんとする狂暴な衝動的行爲が演せられる。戀を得んとする場合に

も、また愛を裏切られた場合にも共に理性と反省とを失ひ、名譽、生命をも犠牲に供して悔いない點に於ては兩者同一である。

さりながら精神の健全で且つ教養のある者は、理性の力によつて一定度まで感情の興奮爆破を抑制するから、たとひ嫉妬の念に燃ゆることがあつても、容易に衝動的行爲に出づるやうなことは無いが、之に反して、精神的低格者たる變質者、神經質の人間の如きは感情が甚だ興奮勃發し易く、且つ之を抑制する意志作用が薄弱であるがため、嫉妬の感情も極めて強烈に作用し、殘酷なる慘劇が演出せられる。嫉妬其者は固より人間性に即する感情であつても、併しそのために凶暴な衝動的行爲に出づる者は決して健全なる精神の所有者とは認められない。癲癩患者、酒精中毒病者の如きは幻覺や嫉妬妄想等のために戦慄すべき殺傷罪を犯すことが稀で無い。文藝の方面に於ても、シエクスピアは、オセロを野蠻人と看做し、トルストイは嫉妬のために妻を打ち殺したポストニシエツフを一種の狂者として描寫してゐる。精神的低格者は嫉妬のた

めに一種の狂的狀態に陥り、その意識は唯だ嫉妬のみに集中するから殘酷なる凶行が演ぜられるのである。彼の七人斬とか十人斬とか云つて、相手を殺したゞけではなほ満足せず、その親、同胞、親近者をも殺傷し剩つさへその死骸にまで凶暴殘忍なる行爲を加へるやうなものは、いづれも這箇の病的人間である。精神の健全なる者は決して此様な慘劇を演出することは無い。戀に熱中することからして既に精神不健全なることを自證してゐる。苟くも理性があり反省があるものならば、戀愛のみに熱中する譯には往かない。戀愛は固より人間に於ける重要な生活現象の一に違ひないが、併し決して人間生活の總ては無い。人生の一部に過ぎざる戀愛のために名譽も財産も生命も棄てるやうな者は、理性意志作用が弱く、感情に動かされ易い精神的低格者である。されば此の如き病的人物によつて行はるゝ處の嫉妬的衝動行爲の凶暴殘酷を極むること亦た怪しむに足らない。

處が茲に注目すべき事實は、嫉妬感情の爆破より殺人罪を犯した者が、その犯行後